
七英雄物語 4

七英雄

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

七英雄物語4

【Nコード】

N5216C

【作者名】

七英雄

【あらすじ】

怒りと悲しみのルキボル国政権争いも終わり、仲間と共にクラシエイカの待つアーガス国へと旅路を続けるルシア一行に新たな困難が降りかかる！それは意外な事態へと発展していく。疾風怒濤の英雄ファンタジー小説第4弾！

第4部 想いは必ずその心に プロローグ アーガス国を目指す者達

3人は遠い道のりを歩いていた。
ガルド会議が行われたバロゲニア神殿から、アーガス国を目指していた。

白い髪の若き青年、ハツシュ。元ゲルニア国將軍ファミリストーン。そしてファミリストンの部下であるオキュラスの3人。

ハツシュの故郷であり、師であるクラシェイカのいる剣の国アーガスへ向かっていたのだ。

そもそも、絶望神の復活と、ハツシュを英雄がいるとゲルニア国へ行かせたのはクラシェイカの指示である。

ハツシュはファミリストーンをその英雄と判断し、なんとか連れてくることになった。その途中、バロゲニア神殿にもう1人の英雄がいるというクラシェイカの指示で探すはずだったが、思わぬ突然の緊急事態に断念したのであった。

大量の絶望獣ジャムが神殿を壊滅寸前に追いやったのだ。とてもじゃないが探す余裕はなかった。

3人は元気がなかった。いつも馬鹿なことを言っているオキュラスでさえも。

理由は2つある。

1つは、ファミリストンの部下であり、オキュラスの先輩であり、ゲルニア国滅亡から生き残り、一緒に旅を続けていたエグリアースが死んだのだ。恐らく絶望獣に襲われたのだろう。最期の言葉も聞けずに、無残な姿で倒れているのを発見した。手厚く葬ったが、動揺は隠せない。

もう1つは、同じく一緒に旅をしていた。子供3人、ボズとアリスエ、パール族のステューも行方不明になっていたのだ。混乱に巻

き込まれたのだ。だが、エグリアースと違い遺体が出てきたわけでもない。希望はある。

「もう少しだ」

誰に言うでもなくハツシュが言った。

ファミリストーンとオキュラスは返事もせずには頷いただけだった。エグリアースの死と、ボズ達の安否で気がでないのだろう。

その時、数人の男が、ハツシュ達を取り囲んだ。賊だった。

「へっ、へっ、へっ、おい、貴様ら、殺されなくなったら、有り金と持っている物全部置いていきな、へっ、へっ、へっ」

賊の1人が剣をチラつかせて言った。

それを簡単に無視してオキュラスがファミリストーンに話しかけた。

「本当にボズ達が心配ですね、將軍」

「うむ。しかしあの子達は、あれでしっかりしているから、大丈夫だと思っようにしてるのだがな」

「だといいんですけどねえ…」

そんな会話を聞きながら賊の1人は苛立たしく叫んだ。

「こらこらこら！俺らが無視するってことは、命がいらないうってことだな！おい！皆！やっちまえ！」

だが。賊の号令に誰一人反応しない。それもそのはず、賊の1人を残して全員逃げていたのだった。

「…えっ…」

賊は後悔した。気付くのが遅かった。ハツシュの持っている大きな剣。明らかに機嫌の悪そうなハツシュの表情。

ハツシュは静か大剣を抜いた。

青ざめる賊。彼は自分の死を覚悟した。

「心配だなあ…ボズ達…」

オキュラスが独り言を呟いた。

第4部 第1章 美食の国へ その1

医療大国ルキボルの王位継承争いが幕を閉じ、3兄弟の次男、オークランドが国王となったことは、各国中を駆け抜ける程の情報ではなかった。やがてジワジワと知れ渡るだろう。

各国の知りたい情報は、他国の内戦よりも、もっと重要なことだった。

先のガルド会議で暗殺されたデスペラド大神官の後任問題。そして、父暗殺の罪で指名手配のお尋ね者になっている4男グリークスの生死である。

最も、父暗殺という罪は間違いであるのだが、今はそれを覆す武器をグリークスは持っていない。

後任問題も、ルキボル国のことではないが、普通は長男であるポーターが継ぐべきである。しかし、誰もが知っている事実。3男ヴィジョンズが後継者に一番近い男だということ。

グリークスはなんとしてもそれを阻止しなければならない。そのためには仲間が必要だ。自分を英雄だと言ってくれるのであれば、それを利用しない手はない。英雄として、地位を獲得した時こそ、ヴィジョンズに対抗できるのだ。本当の父殺しのヴィジョンズに。

グリークスは利用すること、追われる身なので危険が付きまとう申し訳なさを感じながら、今、仲間と共に旅をしている。

英雄だと言ってくれた少年、ルシア。ルキボル国、新王オークランド。パール族のステュー、そしてステューと同じくらいの男の子ボズとアリシエという女の子。

ルシアはまだ謎の人間である。10代の少年だが、何かを悟ったように落ち着いている。彼がグリークスやオークランドを英雄だと旅に誘ってきたのだ。

ルシアには最大の謎がある。3重人格者なのだ。1人は普通のルシア。残り2人の人格は想像を絶する。太陽神の人格と対する絶望神の人格が宿っている。なぜこうなったのか、本人もわからないのだ。

国王になったばかりのオークランドは、ルシアの誘いと、ルシアの身体に宿っている絶望神のことが気がかりで、王という立場もあるが、この旅に付いてきてくれる。回復魔法や医療に詳しい彼は、戦いで傷ついても対応してくれるだろう。心強い仲間である。

子供3人、ステューとボズ、アリシエ。どういう組み合わせなのかわからないが、ガルド会議の混乱に巻き込まれたようだった。

グリークスには特に理由など聞く気もなかったのだが、ボズがこの旅の間、ずっと話していた。滅亡したゲルニア国で何があったのかを。そして、英雄と呼ぶに相応しい自国の将軍と白き髪の戦士のこと。

「……でね、その白い髪のお兄さんがね、あ、ハッシュさんがね、大きな剣を振り回して、化け物をバツタバツタと切り倒して……」

もう何度目になるだろうか、ボズの話に誰も耳を傾けていない。ステューに至ってはうんざりしている。実際ステューはあの場では敵だったのだから、違う意味で聞きたくないかもしれない。

「ボズ、聞き飽きたよ、他の話はないのかい？」

「たまらずグリークスが言った。」

オークランドとルシアは苦笑いをしている。元々気を使い過ぎる2人である。本心はグリークスと同じであっただろう。

「え、これからののに」

残念そうに言うボズにステューが口出しした。

「リサを逃がした時の話をしろよ」

グリークスは頭を抱えた。このやり取りも何度も聞いているからだ。

無口なステューが最近になってよく喋るようになった。ゲルニア国の戦いで兄弟を亡くしたせいで心を閉ざしていたのだが、段々と開いてきている。もしかしたらボズのおかげでもあるかもしれない。

「むむむ…同じことを……。ああ、いいよ、話してやるよ！又アリスっていう奴に弓矢をわざと外れるように……」

「いや、リサを逃がした所の話をしろ」

リサとはボズ達が知り合った少女で、ガシーベ国の人間である。彼女は何を考えているかわからない子だった。だが、その正体は、絶望神四天王の1人だった。逃げたりサを追いかけたボズだったが、健闘虚しく逃げられてしまった。

「この…！」

ボズがステューに飛び掛ろうとしたところをオークランドが止めた。

「まあ、まあ、ボズ。気にしない、気にしない」

「でも、ステューの奴、腹立つんだよ。オークランド王、言ってやってよ」

オークランドの顔が引きつった。

「あ…あの、ボズ？『王』とか付けなくていいから」

一行は、アーガス国へ向かっていた。

クラシエイカの指示通り、ルシアは英雄を探し当てた。現状の目は達することができたのだ。一旦アーガスへ戻り、再びクラシエイカの指示を仰ぐために。

ルシアの前にはボズとステューが言い合いながら歩いていて、その後にはグリークスが続いている。

何気なくルシアは振り返った。後ろにはオークランドが歩いていて。目が合ってオークランドは微笑んだ。

「どうした？ルシア」

「…いえ…」

そう言いかけた時、とてつもない違和感がルシアの身体を雷の痺れのように伝わった。この場に絶対的に足りない何か。

「オークランドさん、ストラングは何処です？」

「ん？ストラングなら、後ろに……」

オークランドは振り返った。

ストラングとはオークランドが幼少の頃から共に成長してきた馬である。オークランドが成長し、恩師ペツチエルから貰い受けた愛馬。動物とはいえ、政権戦争の辛い時期にいつも一緒にいてくれた。オークランドにとってみれば、立派な家族であり仲間なのだ。

「……ストラング？」

その愛馬ストラングが振り返った先にいなかった。姿形消えてしまっていた。

ルシアもオークランドも更にその先の展開に緊張が走った。ストラングが消えていることは確かに問題であるし、心配すべきことである。

それよりも、もっと大変な事態が目の前で起こった。

愛馬ストラングは、アリシエを乗せていたのだった。

目の前で親を絶望獣ジャムに殺されて、声を、言葉を失った彼女は呆けて心ここに在らずの状態だった。何か起こったとしても叫び声も上げられなかっただろう。

「アリシエ?!」

オークランドの声に、前方のグリークス達も振り返った。

つづく

第4部 第1章 美食の国へ その2

「ど…どういうことなんだよ！アリシエ！アリシエ！」

真つ青な顔でボズは何度も呼びかけたが当然返事はなかった。

突如、オークランドの愛馬ストラングが消えてしまった。…となると一緒に乗っていたアリシエも同じ事だった。

「誰も気付かなかったのか…」

グリークスが考えを巡らせる。

オークランドも不可解な表情をした。訓練されたストラングがいなくなるなんて。

「蹄の跡があるんじゃないか？」

グリークスが言った。

「そうだ、足跡だ」

ボズは真つ先に慎重に探し出した。それは容易に発見することができた。

足跡は南の方へ進んでいた。

「この先に確か港があつたはずだ」

グリークスがその方向を指差した。少し遠くに確かに港らしき場所が見える。小さな港町だ。

「そうですね、足跡がそちらへ向かっているのであれば、行くしかないですね」

ルシアの言葉に全員が同意し、一行は急遽港町へ方向転換した。

その町は、ルキボル国内にある港町だった。

各国には大小関係なく必ず1つは港町がある。国内貿易や旅を快適に行うためだ。

このパルス町も、同じような理由で作られた。

商人、行船、漁船、活気に満ち溢れている。

ここへ運ばれた物は、一部の限られた人間が護衛を付けてルキボ
ル城内や各国へ運ばれる。町人はオークランドが王位を継承したこ
とは知っているが、あまり顔を知っている者は少ない。

それが良いのか悪いのか、町へ入ってきたオークランド達をただ
の旅人と見なされていた。

時折、「あつ」と驚かれることもあったので、オークランドはな
るべく顔を隠すように服を着込んだ。

「すごいなあ……」

ボズが感心して声を出した。あまりにも活気良さに驚いているよ
うだった。

グリークスが並んでいる商人の近くへ寄った。

「へい、らっしやい、旦那、今日は良い物仕入れてますぜ。ガシー
ベ国で売られている化粧でさあ、彼女へ贈り物すれば喜ばれること
間違いなし！どうです？」

グリークスはいらないと手を振った後に小さな声で商人に囁いた。
「情報を買いたいのだが……誰か知らないか？」

商人の顔つきが変わった。

「へえ、旦那、何やら変な雰囲気ですね、ここでの情報なんぞ、大
したモンないですぜ」

「そうだろうな。けど、たった今起こったこと出来事なんだ」

商人は笑みを浮かべた。

「なるほど……。その路地を右に曲がった所に男の老人がいる。そ
の老人に『海は今日も荒れそうだ』と伝えてくだせえ。それが合言
葉でさ」

グリークスは礼を言い、謝礼金を払った。

「毎度っ」

愛想良く商人が手を挙げた。

「何処にも色んな情報を持っている人間はいる。その情報売り物

にしている奴もな。ああいう場所で長く商売している奴は、そつちの方も詳しいってことさ」

グリークスがボズに説明した。

「へえ…」

ボズは純粹に感嘆の声を出す。

商人の言う通りに路地を曲がると男の老人がいた。グリークスは老人に近づき、例の合言葉を言った。

「……何が知りたい？ここにはロクな情報はないぞ…」

「俺達の連れの女の子が白い馬と一緒に消えた。足跡がこの港へ繋がっていたのだが…」

老人の眉がピクリと動いた。

「…そんな女の子の情報は入ってきちゃあいないが…、どういふことかは察しがつくわい」

グリークスが金を渡した。それも値踏みされるような金額ではない。ある程度は遊んで暮らせるくらいの額だった。

老人は話し出した。

「多分、その子はバリュアス国へ連れていかれたと思う。美食の国だと色々言われているが、裏では相当胡散臭い事をしているようだからな」

「なぜバリュアス国なんだ？」

ボズの問いかけに老人は言い難そうに首を振った。話したくないようだった。いや、むしろこれ以上のことを知っているということ、喋ることが命を危険にするものだということをわかっている素振りだった。

老人は、よいしょを立ち上がり、その場から離れようと歩き出した。

「ところで、お前さん達、ワシのことをどこで聞いた？」

「…あの先にいる商人達の1人だ」

「そいつらは、恐らくバリュアス国に通じてる者だ。お前さん達も気をつけるがいい」

老人は去っていった。

路地から出てくると、数人の屈強な男達が、ギリクス達を取り囲んだ。それも憎しみのこもったギラついた視線だった。

「あんたら、見ない顔だな」

男の1人が脅すように言った。

「さっきその商人から聞いたが、変なことを嗅ぎまわっているそうじゃないか。何を探しているのか教えてもらおうか」

大抵の者なら、この時点で恐怖し、洗いざらい吐くであろう。その内容によっては、半殺しの目にあって道端にでも捨てられるだろう。

だが。

ここにいる、ルシア、ギリクス、オークランド、ボズ、ステューの5人は違った。

命を懸けた先の政権争いでの戦いで一皮剥けたのか、余裕を持って対峙することができた。

動揺したのは、男達の方である。ボズやステューといった小さな子供までもが、困った顔でこちらを見ている。そんな状況ではないはずだ。もっと驚きや恐がるべきである。初めての体験に男達は戸惑いを隠せなかった。

そんな男達の不安を増幅させる言葉がボズの口から出た。

「てゆうか、おじちゃん達、バリユアス国へ行く船を教えてよ」
何食わぬ表情でボズが言った。

つづく

第4部 第1章 美食の国へ その3

クラウボは、このパルスという港町で産まれて、ここから外に出たことがなかった。漁業を営んでいた親の仕事に共感を覚えることが出来ず、ロクに勉強もせず、悪い仲間と付き合うようになった。

その仲間の内の1人が用心棒風情の仕事をしていたことがきっかけで16歳からこの世界に足を踏み入れることになった。

…といっても世界を知らないクラウボにとって自分自身は大した存在ではないかもしれない。だが、それでもいいと彼は思った。ここで恐れられる存在が気持ちいいし、まるで自分が一番になったような気さえ起こさせる。

それから、6年の月日が経った。

22歳になったクラウボは町の中で最も恐れられている人間になっていた。町のゴタゴタは全てクラウボ絡みの事件だし、ゴロツキからは慕われるようになった。

バリュアス国の方に取り入ったのもクラウボだった。何をしているのかは詳しくはわからないが、金になる。定期的に人を誘拐してバリュアス国へ連れて行く仕事も引き受けていた。

今回も運良く大人しそうな女の子が馬に乗っていた。しかも、その一行の一番後ろときている。用心が甘いとクラウボは思った。長年の経験でどんな馬だろうと、警戒されずに音も立てず連れてくる技術を身につけていた。

当然旅の一行は手がかりを捜しにこの町へ来るはずだ。もう遅い。既にバリュアス国の船の便は出港したのだ。馬も女もその船に乗っている。

しかし、クラウボは不安になる。女の子を捜しにきたこの一行を脅して町から追い出すつもりだったのだが、全く引かない一行に圧倒されている。それも、堂々と意見を言っているのは子供なのだ。

クラウボは世界の広さを実感し始めたと同時に手を出してはいけ

ないものに手を出したのではと焦りを感じた。

「ねえ、おじちゃん、早く教えてよ」

ボズが再度クラウボに聞いた。バリユアス国行きの船を教えてくださいと言っただ。

この状況で簡単に言えることが不思議でたまらない。余裕を出しているのか、もしくはただの馬鹿なのか。

舐められては下の者に示しがつかない。クラウボは叫んだ。

「馬鹿か、クソガキ。はいそうですか教えてもらえるわけないだろうが！」

「でも、あのおじいちゃんから情報を聞いた途端、こうなるってことはさあ〜」

クラウボの怒鳴り声に全く耳を貸さずにボズは喋り続けた。

「そうですね。情報は嘘じゃないってことですね。間違いなくアリシエさんはバリユアス国へ連れて行かれた…」

今度は黒い衣を着ている少年ルシアがボズの言葉に続いた。何かを悟ったような物言いである。

「こいつもか…とクラウボは思った。

「だからそれがどうした？あ？お前からここから生きて通れると思うの……」

クラウボが言いかけた瞬間、仲間の男の腕があっさりと飛んだ。

「ぎゃあああああああ」

「なっ、なんだ？どうした？」

慌てるクラウボにもう1人の子供、ステューが近寄ってきた。驚くことにその子は片腕でしかも残っている腕が刃に変化している。

先程仲間の腕を切り飛ばしたのは、この子供だった。クラウボは青ざめた。

ステューは明らかに怒っていた。例え短い期間だったとはいえ、一緒に旅をしていた者が突然いなくなっただ。それも、理不尽に

見知らぬ国へ連れて行かれた。怒らない理由などない。感情的にステューは攻撃を仕掛けたのだ。

「…バリュアス国への船を出せ。さもないと…ここにいる全員皆殺しだ」

その本気の目を見てクラウボの背筋は凍りついた。自分達がアリシエを誘拐したなどと口が裂けても言えるわけがない。それは自分の死を告白しているようなものだ。

オークランドが腕を切られて泣き叫んでいる男の下へ駆け寄って血止めの治療を始めた。

「すみません。でも、今は本当に切羽詰っているんです。教えてくれませんか？」

オークランドの優しい言葉に若干の癒しを感じたものの、最早断ることができない。

「…わ…わかった…」

クラウボは命令して小さな船を用意させた。一刻も早くこの状態から逃げ出した一心だった。

用意出来た船に、ボズヤルシアが乗り込んでいく。

グリークスがクラウボにいきなり話しかけた。

「バリュアス国まで頼むぞ」

そう言っつてグリークスは先に乗り込んだ。

「…は？何言っつてやる！」

クラウボは聞き間違えたかと思ったが、間違いではなかった。バリュアス国まで頼むと言われたのだ。それはつまり船に同行してバリュアス国までの航路を依頼されたようなものだった。

「俺達はバリュアス国までの道が正確にわからない。だから頼んでいるんだ。ちゃんと金は払う」

グリークスは当たり前前の口調で言った。

クラウボは船の運転が出来ないわけではない。親が漁師であった

ため船の運転技術は嫌でも知っていた。

「ちよっ…なんで俺が…」

抵抗しかけたクラウボだったが、すぐに諦めた。後ろでステュー
が目を光らせていたからだ。断ればあつという間に切られそうだ。
こんな形で初めて町から出るようになるとは思いもしなかった。

観念して船に乗り込んだクラウボを仲間達は哀れな目で見送って
いた。

全員が乗り込み、船はバリユアス国を目指して出港した。

「待ってるよ！アリシエ！」

ボズが大きな声で叫んだ。

予想外の展開で一行はバリユアス国へ向かう。

この先にとつともない暗黒の事態が待ち受けていることも知らず
に。

） 第1章 美食の国へ 終 ） 第2章へつづく ）

第4部 第2章 バリユアス国の謎 その1

バリユアス国は、3国ある島の一つで今から40年前に建国が認められた国である。8国の中では一番遅い国であった。

元々のこの島は人口が僅か200人程度の島であったのだが、経済的には非常に潤っていた。その理由としては食材の豊富さ。環境のせいなのか、この島から取れる食材はとても貴重でどこからでも必要とされたために、貿易で大成功を収めていた。

島長フーティは、機会を逃すことなく商人として蓄えをしていた。フーティは高齢だったが人生を見極めていることはなかった。

野心家だったフーティはその莫大な財力をバロゲニア神殿に寄付した。その見返りとして、バリユアスという島を国として認めさせたのだった。

ガルド歴870年、バリユアス『国』が誕生した。

目的を達成した安心感からか、フーティ王は病に倒れ、この世を去る。噂では110歳だったというが、実際は97歳だった。それも、日頃の健康食材のおかげだろう。

次期王になったのが息子のブロウフィッシュ。

野心はあるがあまり表立つことがなかった父フーティに反して、ブロウフィッシュは逆だった。張り裂けんばかりの野心は彼の性格そのままを表していた。横暴で、我が儘で、利益のためなら、自身のためなら、どんな汚いことでも平気でやってのける男である。更に厄介なのは、自分で指示したにも関わらず、その責任は負わないという指導者として有り得ない人間なのだ。

そんな国にアリシエは連れ去られた。何もない方がおかしい。何か別の邪悪な理由が隠されている。ルシア達一行は不安を抱きつつバリユアス国へ向かって行った。

港から出発して半日が経った。そろそろバリュアス国に着く頃だ。クラウドは面倒臭そうにグリークスに報告した。

わかったとグリークスは言うと、ルシアやオークランドにも伝えて上陸の準備を始めた。

後悔の念がクラウドの頭を駆ける。喧嘩なんか売らんじゃなかった。いや、もつと先の話だ。アリシエを誘拐するんじゃない。

世間知らずな井の中の蛙状態のクラウドに欠けていたのは、腕力でも権力でもなく、人の見る目だった。

まあ、どうでもいい…クラウドは溜息をついた。グリークス達をバリュアス国の港で降ろして、さっさと帰るだけだ。クラウドは既にそう決めていた。

だがしかし。それは甘い考えだったということを思い知らされる結果、自業自得ということになるのだが。

港に着いてすぐクラウドに対して話しかけてきた男がいた。顔見知りのリオだった。変なことを言わなければいいが…とクラウドは不安になる。リオはクラウドの行いの全てを知っているし、無神経な男だった。周りを見て何かを悟るといふことなどあるわけがない。「おう、クラウドじゃねえか。いきなりどうしたんだ？てゆうか、お前ここに来るの初めてじゃねえか？」

今回だけは、リオの人懐っこくて明るい性格に苛立たしさを覚える。

「あ…ああ。まあ、外の世界も見ておかないとな」

常日頃から思っている願望をつい口にしてしまった。自分に余裕がない証拠だ。

口数少なく話を終えて、クラウドはグリークス達の方を向いた。

「さ、降りてくれ。港を抜けた先に城があるはずだ。後は勝手にしてくれ。ま…まあ、さっきのことは謝るから」

心にもないことを簡単に言える。連中ともう少しで別れることが出来そうなので段々と余裕が出てきたのだろうか。

何も言わずにグリークス達は船を降り始めた。

そこへ再びリオがやってきた。

「そっぴやよ、さっき恐がってるのか無口で静かな女の子が連れてこられたよ」

クラウボは青ざめた。ボズが敏感に反応する。

「あれはお前の仕事だろ？なかなか良い物捕まえてくるじゃないか肩を叩くりオの手をクラウボは跳ね除けた。

「な…何言つてやがる。俺がそんなことするわけねーだろが」

「はあ？だってよ、クラウボの仕事だつて連れてきた奴が言っていたぜ」

絶望的だ。クラウボは脂汗が出てきた。ゆっくりと振り返った。

怒りを露わにしたボズ。驚きを隠せないオークランド。やっぱりと見抜いていた表情のルシアとグリークス。そして、片腕を刃に変化させて今にも斬りかかろうとしているステュー。

「帰すわけにはいかなくなりましたね」

冷静にルシアが言った。その言葉に全員が頷いた。

「だから、アリシエを何処に連れて行つたのさ、この誘拐魔！」

ボズがクラウボに怒鳴り散らした。

「知らねえよ、本当に。俺の仕事は…その…捕まえるだけ…だからさ」

バツが悪いようにクラウボは下を見ながら言った。

ステューの刃がクラウボの喉に向けられた。

「…だつたら、その辺で聞いて来い、聞かないのなら、殺す」

ステューの本気とも取れる言葉に誰も止める者はいなかった。それが恐怖感を増幅させる。

「わ…わかつたよ、聞いてくればいいんだろ」

クラウボは覚悟を決めた。まずは、話しやすい相手からだ。クラウボはリオがいる場所へ足を進めた。

「おいおい、なんだよ、あの連中は？」

リオが心配そうに言ってきた。

これは真実を話す機会だ。幸い距離があるために話し声も聞こえない。

「いや、実はな……」

クラウボは事情を話す。

「……全く……面倒なことじゃがって」

「すまねえ」

「だけど、俺も城に連れて行くってこと以外知らねえんだ。秘密秘密だよ」

リオは頭を掻きながら言う。

城に連れられるということとは、かなりの事だとクラウボは理解した。

「でも、まあ、安心しなよ、クラウボ」

リオは笑みを浮かべる。

「え？」

「この港の用心棒集団に、奴らを痛めつけるように依頼しておいたからな。最初っから怪しかったんだよな、あいつら」

「い……いや……それは……」

クラウボはつい少し前にあった出来事を思い出した。

心配するクラウボを尻目に、ルシア一行はあっという間に、ガラの悪い奴らに囲まれた。

「またかよ……」

ボズがうんざりして言った。

「あんたら、見ない顔だな」

囲んでいる1人の男が低い声で言った。どこかで聞いた台詞だ。

クラウボは頭を抱えた。これから起こる結末を予想出来たからだ。自分が喧嘩を仕掛けた時と台詞までそっくりである。

オー克蘭ドとグリークスが顔を見合わせて頷いた。ルシアも頷いた。ボズも困った顔をしながら頷いた。

それを確認したステューの腕が刃へと変わり、キラリと光った。

つづく

第4部 第2章 バリュアス国の謎 その2

「それで？アリシエが連れて行かれた城へ案内してくれるんだろ？」
ボズが、顔を腫らしたリオの顔を眺めて言った。

リオの手配で用心棒達をルシア一行にけしかけたままでは良かったのだが、こんな普通の奴らが強いとは思わなかった。

それも、片腕のステューの強さは子供のくせに信じられない程の腕だった。用心棒達はあつという間に倒されて、手配したリオのことを簡単に吐いた。かくして、リオは捕まり、お仕置きで殴られたのだった。

「う…あ、ああ…」

リオはチラリとクラウドを見た。助けを求める視線だったのだが、クラウドのどうすることも出来ないといった表情を確認して、観念した。

「決まりだ。早速行くぞ」

グリークスが立ち上がった。

グリークスの心境は複雑だった。バリュアス国といえば、彼が好意を寄せているルリードという女性がいる国なのだ。ルリードは、プロウフィツシュ王の右腕というべき側近である。こういった状況でこの国にくることは正直本意であった。

もしかしたら、バリュアス国のやっている誘拐はルリードの命令かもしれないのだ。グリークスは一刻も早くその疑いを消し去りたくて仕方なかった。ある意味、ボズよりも誰よりも真相を知りたいのかもしれない。

「よおおし！早く行くよ！みんな！」

ボズが大声を出して、グリークスの後を追った。

「とにかくまずは行くしかないですね」

ルシアとオークランドはお互い話しながら歩き出した。

「お…お前、本当にやっかいな奴らを連れてきやがったな」

リオがクラウボを睨む。

「馬鹿言え、勝手に喧嘩売って勝手にやられてるのはそっちだろうが」

クラウボも負けじと言い返す。

そんな2人の言い合いに全く関心のないステューは、2人の背中を押しした。

「早く歩け」

リオとクラウボは渋々従うしかなかった。

リオの人脈で荷馬車を用意することが出来た。馬を操るのはクラウボの役目だった。馬を扱うことにかけては右に出る者がいないからだ。逃げないために、ステューが隣に座って付き合うことになった。しかし、クラウボだけでは体力がもたないので交代制に決めて、リオを含めた残りの5人は荷台に乗った。

バリュアス城へは、2日はかかる。途中に村や町があるので、そこで休憩を取りながら向かうことになる。

荷馬車はバリュアス城へ出発した。

「そもそも、なぜ誘拐するのですか？」

出発して少し経った頃、単刀直入にルシアがリオに質問した。

リオは困った顔をして、知らないと言う。

「いや、本当に、知らないんだ。まあ、噂は…」

…と言いつつ下に下を向いた。

「なんだよ、言えよ！アリシエをどうする気だ」

顔を真っ赤にボズが怒鳴った。

「色んな噂があるんだ。奴隷や家畜として扱ったり、ブラウフィッシュ王の悪趣味につき合わせられたり…」

リオの何も考えずに出る言葉にボズの身体が怒りの興奮で震えだ

した。

「他にも…美食の国というからには、常に『食』を追求しなければならぬ。なんでも人間の女の肉は美味しいという噂が…」

グリークスの腕がリオの首を掴んだ。

「…黙れ、クソ野郎」

「ごほつ、な、なんだよ、ごっつ、うえ、ごほつ、聞いたのは、がっつ、そっちだろっつが…」

慌ててオークランドが止めに入る。剥がすようにグリークスの手を外した。ボズは怒りを飛び越えてるようだ。

「リオさんも、言い方を考えてください。噂でしょう?」

オークランドが落ち着いて聞いた。

「ま、まあな、あくまでも噂で、実際にそっついう目にあつた奴や家族はいないしな」

首もとを擦りながらリオは苦しそうに続けた。

「でも、今から言う噂が一番信憑性高いんだけどな。人体実験をしてるっついう…な」

声を潜めてリオは言った。

ボズの動きが止まった。

人体実験…。

ボズには覚えがある。

かつて滅亡した故郷ゲルニア国。その王であるセラミスが、人体実験を繰り返して、化け物を生み出していたことを。

可能性は高い。現実にもその実験をしている人間が身近にいたのだ。リオのいう信憑性は間違っていないかもしれない。

「そこの馬車、止まれい」

突然大きな声が響いた。

周りを大勢の兵士に囲まれていた。さすがに逆らうわけにはいかない。クラウボは必死で馬を止めた。

兵士達の中から、大きな丸々と太った丸男がのっそのっそと前へ出てきた。

「貴様ら、旅の人間か？」

丸男は高飛車な物言いでクラウボに聞いた。

「ええ、そうです」

「何処に行く気だ？」

「こ、この先の、バリユアス城へ」

丸男の圧力にクラウボは極度の緊張を強いられた。

「何をしに？」

クラウボは言葉に詰まる。まさか、誘拐された知り合いを取り返しにいくなどとは言えない。証拠も何も無いのだ。決め付けるわけにはいかない。

「観光ですよ」

荷台からルシアが顔を出した。

「観光だと？」

丸男は怪しそうに睨んだ。

グリークスはお尋ね者であるし、オークランドは一国の王、バリユアス国の人間であるリオを出すわけにはいかない、更にボズは子供だ。ここはルシアが行くしかなかった。

「ええ、そうです、美食の国と言われている食事を是非堪能したくて、ここまで来たのですが、何かいけないことでもあるのですか？」

ルシアの堂々とした態度の丸男は少し腰が引けた。

「うむ。実は港の方で、見知らぬ一行に襲われた者がいてな、調査中なのだ」

それは明らかにルシア一行なのは間違いないのだが、事情はかなり違う。襲ってきたのは向こうのはずだ。

「ま、いい。止めて悪かった。行くが良い」

丸男は片手を上げて馬車の通り道を作った。

馬車はゆつくりと進み出した。上手く切り抜けたと思ったが、事態はそう簡単にはいかなかった。

リオがこの時とばかりに荷台から飛び降りたのだ。

「あっ」

ボズの声。

「こいつらです！こいつらが犯人です！私は脅されてここまで連れてこられたんです…！」

リオが泣き叫ぶ。

「あ、あいつ」

クラウボが言った。内心自分も同じ事をしたと思った。

「出せ、早く、全速力だ」

ステューがクラウボに指示した。

「はあっ！」

クラウボの動きに合わせて馬が勢いよく走り出した。

「追えっ！追えっ！」

丸男の叫びが後ろから聞こえた。

「何処に行っても追われているような気がするんだけど」

ボズの一言に全員が同意した。

つづく

第4部 第2章 バリユアス国の謎 その3

バリユアス国の島中心に堂々とそびえているバリユアス城。周りを町で囲まれた城である。

ブロウフィツシュ王は下品な笑い声を発していた。

「ぶわっはっはあ〜」

兵士や側近の人間はその笑いに慣れてしまっているが、他国の者が聞くと違和感極まりなく不愉快な気持ちになるであろう。

「おい、そろそろか？」

ブロウフィツシュは近くにいた大臣に話しかけた。

「ええ、もうすぐでございます。明日には届くでしょう」

大臣は答えた。

「そうか、そうか、よし、よし、楽しみだわい。では、祝いに盛大な宴をひらくぞ、準備をせい」

ブロウフィツシュは醜い笑顔を見せてもう一度下品な笑い声を発した。

疾走。

ルシア達が乗っている馬車は、限界を超えたと思えるくらいの勢いで走っていた。

必死で手綱を持つのはクラウボ。追っ手の追撃をかわすのに精一杯だが、荷馬車と馬を比べること自体が間違っている。馬車はみるみる内に追いつかれた。

「というか、あんたらなんとかしてくれよっ！俺にはこれが限界だ」
クラウボが叫んだ。どんなに腕が良くても馬の能力や重さも加わっている。今のクラウボの実力だとこれが頭打ちだ。

「ここは僕の出番だね」

ボズが胸を張って前へ出た。オークランドから貰った弓を手にし

て。

「そうか、ボズ、頼むよ」

オークランドが言った。

「ボズ、馬を狙え。お前の力だと撃ち抜くことは出来ないが、驚かせることは出来るはずだ」

グリークスがボズの肩に手を置いた。

「うん、わかった」

ボズは荷台から乗り出した。

「あいつら何かするつもりです」

「むむっ、なんだと？」

荷馬車を追う兵士達の隊長である丸男は荷台を睨んだ。

ボズが弓を持って準備をしているところが見えた。

「奴ら、弓を持っているぞ、気をつける！」

「ははっ」

兵士全員に指示をして丸男は馬を走らせながら剣を抜く。

「子供の弓矢など、簡単に弾いてくれるわあ！」

ズガシャッ。

丸男が言った途端に部下の兵士が馬と一緒に転げ落ちた。

「なにい?!」

驚く暇も無く残りの兵士達も見事に落ちる。

「そうか、小賢しい!我らではなく馬を狙っているというのか!皆、落ち着くのだ」

丸男が言った時は、自分の馬が大きく舞い上がった後だった。馬は丸男と一緒に崩れ落ちた。

「ぐああああ…」

悲鳴が遠ざかっていくのを馬車は感じながら減速することなくその場を後にした。

ルシア達が目指していたバリユアス城へ行く前に宿泊する予定だ

った町、グレスコ町。城へ行くにはこの町を通り過ぎないといけないために、兵士が多い。警備が徹底しているのだ。まだルシア達の情報には知られていない。

真つ赤な荷馬車がグレスコ町へ入ってきた。周りが騒ぎ出した。

赤い色の荷馬車には理由がある。ブラウフィッシュ王専用馬車という意味で、絶対に手を出すことは許されない。例えそれが盗賊であろうとも、国の掟としてあつてはならないことなのだ。

普通であれば、荷台の中を確認するのだが、赤馬車はそんなことは簡単に通過させる。

そこまでの態勢を持つてくるといふことは、如何わしいことをしているに決まっていると疑われるのも無理もないことだが、当のブラウフィッシュ王はそんな疑惑や批判など何とも思っていないため、どうとなることはない。

赤い荷馬車には予想通り、誘拐されたアリシエとオークランドの愛馬ストラングが乗っているが、中身の確認をしないので馬車は通過してバリュアス城へ一直線に進む。

ルシア達は、追いつけることが出来るのであろうか。

「またか…」

グレスコ町へ入ってきた赤馬車を見て男が呟いた。

頑丈な肉体、四角顔の男。ガルド会議の時にブラウフィッシュ王の護衛として付いていったムトウだった。

自国の王とはいえ、ブラウフィッシュの横暴さには呆れていた。

赤馬車の中には毎回何を積んでいるのか。ムトウの疑問は膨れ上がっていた。

「…どうでもいい、さ。王のことなんて、さ」

隣にいたもう一人の細身な男がムトウをたしなめた。語尾に「さ」を付けるのが癖の変な男である。

「そうは言うが、アルヴァニー。気にはならないのか、王が毎回毎

回何をしているのか」

ムトウが悔しそうに言った。

「気にはなるがどうしようもない、さ。詮索したところでわかるわけがない、さ」

アルヴァニーと呼ばれた男はお手上げと言った。

ムトウの疑いも結局は本人だけの考えとして赤馬車はゆっくりと通り過ぎていった。

赤馬車が過ぎてからまもなくして1台の荷馬車が到着した。

ムトウは、手綱を持っていたクラウボの顔に見覚えがないせいで気になっていた。

荷台から、ルシア、オークランド、グリークス、ステュー、ボズの5人が降りてきた。

「…他所の国の者か…？」

ムトウは誰に言うこともなく口に出した。

長年の勤なのか、何かあると感じた。それも王に関わる何か…。その勤は夜が明けた時にわかることになる。

ルシア達を追っていた兵士達の報告によって…。

つづく

第4部 第2章 バリユアス国の謎 その4

ルシア達を追っていた丸男は、ボロボロの状態でグレスコ町へ帰ってきた。まさか子供の弓であっけなく馬を倒され、逃げられたなんて言い訳をしたくなかったが、この有様では何を言われても仕方ない。

「ロール、どうした？その傷は？」

ムトウが丸男に話しかけてきた。ロールとは丸男の名である。

「あつ、ムトウさん」

ロールは返事をしたが、すぐに下を向いた。

「おいおい、どうしたんだ？」

面倒見の良いムトウは落ち込んでいたり、様子のおかしい者を見るとつい気にかけてしまう。時にはそれが大きなお世話となることもあるのだが、わかっていても止めることはできなかった。

「じ…実は…」

幸い、ロールはムトウを慕っている1人なので、簡単に話し出した。怪しい荷馬車の情報が入り、止めたところ急に逃げ出して追いかけている最中に逃げられた…と。

ムトウが怪訝な顔をする。ロールの言っている馬車や弓で攻撃した子供の特徴など、先程町に入ってきた馬車と酷似している。

そのことを聞く前にロールが「あつ…」と指差した。

「アレです…。あの馬車ですよ、ムトウさん」

ムトウの直感は当たっていた。ロールが指差している先は、まさにあのルシア達に乗っていた馬車だったのだ。

「間違いないのか」

「当たり前ですよ。見間違えるわけありません。一気に押し込みましょう！」

「まあ、待て。ここは任せろ」

ムトウはロールを止め、ルシア達の宿泊している宿屋へ向かった。

クラウボは疲れきっていた。アリシエを誘拐したために、バリユアス国に来ることになってしまい、自業自得とはいえ、危うく命を落とすところだった。早く用件を済ませて逃げ出したいと望んでいた。1日も早く目的地のバリユアス城へ一行を連れて行くことだ。

「明日も早いぞ、もう寝ろ」

グリークスがクラウボに毛布を放り投げた。

「あ…どうも」

部屋は狭く、そこに全員が入り込んでいるため非常に窮屈だった。ボズとステューの2人の子供は特別に寝台で眠るよう指示されていた。2人はお互いが嫌そうだったがあまり文句も言わずに寝付いた。よほど疲れていたのだろう。グリークスとオーランド、そしてルシアは床である。当然クラウボも床だった。

明日も早いということは嘘でもなく本当のことなのだろう、クラウボは疲れを取るために早々に眠りに付いて現実逃避するために楽しい夢でも見ようと目を閉じた。

うとうとし始めた時に、部屋の扉を軽く叩く音が響いた。

クラウボは勿論のこと、グリークス、オーランド、ルシアは飛び起きた。子供達は起きることなく寝ている。

「誰だ？」

グリークスが言った。

「遅くにすまない。バリユアス国の勇者、ムトウと言う。怪しい者ではないが、聞きたいことがあってここにきた。良ければ部屋に入れてもらえないか」

悪意の感じられない声が扉の向こうから聞こえてきた。

「わかった」

グリークスは返事をするので扉を開けるようクラウボに指示をした。この夜遅くの訪問はある程度の確信があつての訪問なのだろう。

無理に断るよりか話し合えるのであれば話し合いで解決したい。目

的はアリシエを取り戻すことだとギリクスは判断した。

扉を開けると、ムトウが大きな身体を見せながら入ってきた。

「すまない」

ムトウは礼をした。夜が更けていることもあってムトウの声は心なしか小さい。

「単刀直入に言うが、部下が君達の馬車を追っていたと聞いた。それに関して君達は何か言うことはあるのだろうか」

「ある」

ギリクスは一言断言した。

「俺達はルキボル国からアーガス国へ旅をしていた。その時、アリシエという女の子が誘拐されて、追跡した結果、あんた達のこの国へ連れて行かれたと聞いた。そこにいるクラウボを案内役にしてここまで来んだ。狙われようとも俺達は退かない。アリシエを救うためにはな。バリユアス城まで必ず行く」

ギリクスの説明を聞き、ムトウは絶句した。なぜなら、バリユアス国専用の赤馬車がまさにそのアリシエ誘拐に関わっていることを物語っているからだだった。

「…そうか…わかった…」

ムトウはしばらく考えていたが、意を決したように口を開いた。

「城へまではなんとかしよう。部下にも手を出させないように伝えしておく」

オー克蘭ドの表情が明るくなった。

「あ…ありがとうございます」

「確かに最近国のしていることが怪しいと感じていた。今日も赤い馬車が通り過ぎたのだが、君達の話から予想すると、その馬車の中にアリシエという子がいたのかもしれない」

国への疑問を持っていたムトウは何とかしてあげたい衝動に駆られた。本来であれば許されることではない。逆行行為と思われるも仕方ないのだが、あくまでも城へ到着する手助けだけであれば、大罪にはならないはずだとムトウは考えていた。

「へえ、それで、さ。ムトウ1人でいったの、さ」

アルヴァニーはロールの報告を聞いていた。ムトウと同じ勇者のアルヴァニーはムトウのように甘くはない。

「そうなんです。アルヴァニーさん。でも、ここは捕まえるしかないと思うんです」

ムトウを慕っていたロールだったが、さすがに今回は納得いかなかった。逃げられた相手が目の前にいるのだ。何も出来ないということが悔しくてたまらない。

「そう、さ。じゃあ、さ。突入するしかないだろう、さ」

アルヴァニーの指示で兵士が集り始め、宿屋の前に陣取った。

「ムトウが出てきた同時に、さ。突入、さ」

アルヴァニーが言った。

バリユアス国の兵士は、ムトウが出てくるまで静かに時を待った
…。

つづく

第4部 第2章 バリユアス国の謎 その5

ムトウとアルヴァニーは幼馴染だった。

正義感溢れたムトウと違って、アルヴァニーは長いものに巻かれる性格だった。対照的な2人だったが、少年時代に好きな女の子を取り合いになって喧嘩になった。結果引き分けに終わったのだが、この日を境に2人の友情は深まっていった。

どこへ行くにも2人は一緒だった。大勢を相手に喧嘩した時も一緒だった。お互いがお互いの行動を予測出来るために、2人の息はぴったりだった。例えどんなに大勢に囲まれようがムトウとアルヴァニーは負け知らずで少年時代を過ごしたのだ。

月日が経ち、国の兵士を目指す志は変わらなかった。

だが、兵士になってからの目標は少しずつズレていくことになる。階級など気にしないムトウは相変わらずの正義感で納得がいかないことであれば誰だろうと意見を述べた。その意見が的確であればあるほど、ムトウは上の人間からは煙たがられた。

反対にアルヴァニーは、野心があつた。偉くなりたい。出世したい。そんな気持ちで芽生えていたのだ。上を望むことは悪いことではない。しかし、時として冷酷な選択をしないとイケない時もある。それがたとえ家族であろうとも…。

ムトウが宿屋に入ってからかなりの時間が経つ。怪しい団体と話をするためということだったが、アルヴァニーはそんな甘くはなかった。話などする前に突入して捕まえるべきであると判断した。

まずはムトウが話し終えて宿屋から出てくるのを待った。ムトウは怒るだろう。けれど、精一杯の気遣いだ。話し中に突入すれば、ムトウの顔も潰れる。あくまでもムトウとは別の動きとして…とアルヴァニーは考えていた。

「結局は…さ。怒るだろうが…」
アルヴァニーは呟いた。

「…アルヴァニーさん…」

兵士に1人が不安な顔で振り向いた。周りも不穏な空気が包み込む。

ムトウが宿屋から出てこない。あまりにも遅い。

それはアルヴァニーも感じていた。

「……………」

はっ、とアルヴァニーの脳裏にあの少年時代の頃が蘇った。

どこへ行くにも一緒だった。『お互いがお互いの行動を予測出来る』2人の息はぴったりだった。

「しまった…」

アルヴァニーは悔しそうに唇を噛んだ。

「突入だ！行けっ！」

アルヴァニーの命令が響いた。口癖など初めからなかったのか、怒りで忘れたのか出てこなかった。

「しっしかし、ムトウさんが…」

「構わんっ、行け！」

兵士が宿屋に向かって走り出した。

すぐに兵士が慌てて報告した。

「いませんっ！宿屋に奴らの姿も、ムトウさんも、裏口から逃げたようです！」

お互いがお互いの予測が出来る。

ムトウはアルヴァニーが兵士を突入してくることを予測したのだ。だからこそ、裏口からの脱出をルシア達に教えたのだ。アルヴァニーはそれに気が付かなかった。

「くそっ、ムトウめ。……お前の動きを読めるのはこちらと同じだぞ」

アルヴァニーはそう言うと考えを巡らせる。

ムトウが奴らの逃亡に加担する理由はなんだ？全く知らない奴ら

をいきなり信用する理由はなんだ？ムトウの思いと奴らの思いが一致したから？ムトウの思い？最近の思い？国の不満、疑惑……。

アルヴァニーは馬に飛び乗り、兵士達に命令した。

「城だ、ムトウはバリュアス城へ向かう気だ。城への道筋を全て止める、そして伝令を出せ！…さ」

思い出したように口癖が復活した。

一方、ムトウの指示で宿屋から脱出したルシア達は、全力で走っていた。頼りの馬車はない。取りに行く暇などなかった。

さすがにボズとステューは寝起きのためにまともに走ることは出来ない。ムトウが2人を抱えて走っている。彼の鍛え抜かれた力は子供2人を抱えることなど容易いことだ。

「…ま…また逃げてるの？」

ぼくとした寝起き顔でボズが言った。

「黙っている、舌を噛むぞ」

ムトウが言った。

ボズが「誰？」と言いたげな表情になったが、まだ考えるまで脳が起きていない。ボズはムトウに従い口をつむった。

「なっなんで、俺が、こんなっ、ことに」

クラウボが、ひいひいと荒い息を吐いている。

「助かりましたムトウさん。でも大丈夫ですか？」

苦しそうにルシアが聞いた。まだ走るには体力が厳しそうである。

「なあに、大丈夫だ、気にするな」

ムトウは笑顔を見せた。

「ここまで来れば問題ないのでは…？」

同じく苦しそうに走っているオークランドが言った。

「駄目だ。アルヴァニーという奴は、恐ろしく頭の回る奴でな、きつと、宿屋を抜け出したのも、バリュアス城へ向かっていることもお見通しだろう。このまま正直に行っていたら待ち伏せにあって捕

まる。かと言って追っ手もいるから止まることもできん、挟みうち
にしようと思っっているからな」

ムトウの心配はここだった。お互いの行動が読める2人だからこ
そ次なる動きがわかる。アルヴァニーは間違いなくあらゆる道を押
さえにくるはずだ。そうなると城へ入るのは難しい。アルヴァニー
の裏をかくには自分の予測と別の考えが出来る人間が必要だった。

「つまりムトウ。その言い方だとあんたもそのアルヴァニーって奴
の動きがある程度は読めるし、向こうもあんたの動きが読めるんだ
な」

話しかけてきたのはグリークスだった。

「ん？あ…ああ、まあ…な」

一瞬の期待がムトウの目の前を通過した。

「よし。聞くが、あんたがこのまま城を目指すのであれば、どう行
く？」

グリークスの質問にムトウは考えた。

「うゝむ。回りくどいことはしたくない。堂々と正面から行くかな
ムトウの答えにグリークスは頷いた。

「わかった、ならば正面から行こう」

横で聞いていたクラウボが叫んだ。

「おっ、おい、馬鹿なこと、言うなっ、よ。さっき読まれるとかな
んとか言っただじゃねえか」

「…なるほど…そういうことですか」

ルシアが感心しながら続ける。

「僕達が宿屋から逃げられたのは、ムトウさんがアルヴァニーさん
の動きを読んだからこそです。そうなると今度はアルヴァニーさん
もムトウさんの動きを読むはずですよ。普通で考えれば、正面から来
る…」と

「だからヤベーだろ」

クラウボがどうだと言わんばかりに食って掛かる。

「普通で考えれば、ですよ。ですが、アルヴァニーさんはそれをムト

ウさんが既に予測していて、正面ではなく脇道から来ると読んでるはず。なぜなら一度ムトウさんに読まれているから」

「その通りだルシア。一度予測されたから、次も予測されていると考える。そうなるとその裏をかきたくなるものだ。正面はきつと一番手薄な場所になっているだろう」

グリークスが自信たっぷりに言った。

「そうか、そういうことか」

少し遅れてオークランドが言った。クラウドはまだよくわかっていないようだった。

「城に入れば隠れるところくらいあるのだろうか?」

「うむ、それは任せる。では正面から行くのだな、一気に行くぞ」

ムトウは力強く言った。同時にこの若すぎる一行を頼もしく感じた。

つづく

第4部 第2章 バリユアス国の謎 その6

ムトウが裏切り者になったという噂はあっという間に城、町に広まった。

それはグレスコ町からルシア達と一緒に飛び出してからまだ1日しか経っていない。

兵士から、側近、大臣、王にまで届いた噂だったが、王は馬鹿馬鹿しいと一蹴した。

ムトウに対しての信頼ではない。そんな話すら興味ない。ブラウフィツシュ王は自分のことしか興味がないのである。

ブラウフィツシュ王が持っているもう1つの興味。これからの楽しみな事。辿り着く少女を使った余興、それが王の望み。

しかし少数だが、ムトウの行為を裏切りではなく、突発的な出来事だと悟っている者がいる。

その中にはブラウフィツシュ王の右腕である若き女ルリードもいた。彼女はムトウのことをよくわかっていて。王への不満は抱いているが、国への忠誠心は揺らぐことがないということを知っていたからだ。

ルリードの直感は当たる。何かに巻き込まれているのだと思った。それも王が、国が関わっている大きな事に。

「おう、きたか、きたか」

ブラウフィツシュ王は満面の笑みで騒ぎ始めた。

待ちわびた赤い馬車が到着したのだ。今、最も楽しみにしている余興。その主役なる人間、ブラウフィツシュにとってみれば「物」だろうが、とにかく到着した。

「いいか、大事に扱えよ」

王は兵士に命令し、誰かを探すようにキョロキョロし始めた。

「おい、ルリード、ルリードはどこだあ?!」

ブロウフィッシュの叫び声に、端からルリードが現れた。

「呼びましたか?王」

物静かにルリードは言った。美しく鋭い視線がブロウフィッシュを見据える。

「おお、そこにいたか、ルリード。喜べ、今日も、例の余興じゃ」

ルリードの反応を観察したかったのか、覗き込むようにブロウフィッシュは言った。

「そうですか」

氷のルリードと呼ばれる彼女は表情を出さずに返事をした。

「…なんだ、それだけか?『お仲間』がきたんじゃぞ」

ブロウフィッシュは意味深な言葉を投げかける。

ほんの一瞬、誰にも気付かないほんの一瞬だけだが、ルリードの目が泳いだ。

「仲間など…いません」

そう言うルリードは踵を返して王の前から消えた。

「ぶわあっはっはっはっ!」

満足気に笑うブロウフィッシュの笑い声が城内に木霊した。

「おい、ムトウの奴、裏切り者になったみたいだな」

城下町には兵士専用の訓練場がある。ここで兵士を鍛えたり、作戦を整えたりするのだが、今の話題は当然ムトウのことだった。

「噂だと、城に向かってくるってよ」「じゃあ、ここにもくるってことじゃないか」「なんだよ、面倒だな、アルヴァニーの軍に捕まればいいのにな」

よくある愚痴が飛び交う中で、どうしても我慢できない者もいる。

「違う!ムトウさんが裏切り者になるはずはない!」

まだ少年に間違えられそうな童顔の男は、ムトウへの悪い噂を一掃するつもりで叫んだ。

「だったらよマハラ、説明できんのかよ」

兵士の1人が、マハラと呼ばれた童顔の男に質問した。

聞いたマハラは怒り顔で言い返す。

「まず、裏切られたとなぜ思うんだ。もしかしたら脅されているかもしれないじゃないか」

「はっ、脅される？あの戦士ムトウだぜ？あの屈強なムトウが脅されるような状態になるわきゃねーだろ」

兵士も負けじと意見を述べる。

「…む…確かにそうだが、曲がったことの嫌いなムトウさんがそういうことをするってことは、きつと何か理由があるんだよ、正しい理由が」

「逃げ出して、敵扱いになるくらいの正しい理由ってなんだよ」

「そんなこと知る訳ない、とにかく今言えることはムトウさんを信じるんだ」

ムトウのことが大好きなマハラは、どんなことがあってもムトウを悪者にはしたくなかったし、本当に悪者になっているわけないと心の底から思っていた。

「信じられないね、そんなこと」

兵士は呆れて手を挙げた。

こんなやり取りが延々と続いてからしばらくして一報が届いた。

渦中の中のムトウ率いる一行が、堂々と正面に現れ、城下町へ投入してきたのだった。そしてまんまと進入を許してしまったのである。

正面ではなく周りを集中警備していたアルヴァニーの裏をかいたのだ。

町の中は厳戒態勢の指令が出た。慌てて兵士達が飛び出していく。紛れて飛び出したマハラはムトウに会いたいことだけを考えた。真実が分かるし、手を貸すこともできる。

マハラは喜び勇んで町中へ出た。

突入したルシア達はムトウの案内ですぐに安全な家に逃げ込んだ。

「ここが安全だという根拠はないぞ」

グリークスが真っ先に意見した。

「なぜだ？ここは俺の家だぞ」

ムトウは自信持って言った。

「ここがお前の家なら一番最初に調べられるだろうが」

グリークスは呆れて言う。

「いやいや、ここはもう何十年も使っていない家だ、俺のいつもの家は城の中か、さっきの町にあるからな。この家は誰も覚えていない、心配するな」

「だいたい」

「早く、アリシエのところにいこうよ」

急かすようにボズが言った。

「焦んな坊主。もう少し様子を見よう、町に入ったことで警戒が強まっているからな。ここは待機だ」

ムトウは背伸びをして床に転がった。身体の疲れを休ませるためだ。

城の中に入るために、一時の休息を全員はとった。

「 第2章 バリユアス国の謎 終 〳 第3章につづく

第10回 こぼれ話

皆さん、いつもありがとうございます。

読んでくれている方も、読んでない方も、ありがとうございます。

第4部までできてしまいました。

今回は早めに終わらせて、年内中には第4部を終了。
年明けに第5部の開始を予定しています。

そうになると1週間毎の（しかも最近遅れている）掲載更新だと言間に合わないのです。

時期を見て、祭りの如く連続掲載をしようと思っています。

事後との都合上なかなか書く時間がなくて、焦っています。
遅れることが申し訳なく感じています。

サブタイトルの「想いは必ずその心に」ですが、題名の意味も徐々にわかってきますので、楽しみにしていて下さいね。

全然活躍していない物語の主人公ルシアが気がりですけど・・・。

これから始まる第3章は、ルシアの話は休憩して、久しぶりのハツシユ達の近況報告の話です。

簡単に終わらせて、第4章へと続きます。

スピード展開を予定してますので、これからもよろしくお願いしま

す。

第6章くらいで、終わらせるように考えていますけど、第3部の時も同じように考えていて大幅に延びたことがあるので、正直わかりません。

もしかしたら、年内には……、いやいや、なんとか頑張ります。

負けずに続けますから見捨てずに付いてきて頂ければありがたいです。

一生懸命書いていきますので、よろしくです。

それでは皆さん、第3章お楽しみにい〜。

今年もあと少し、全力で突っ走ります！

第4部 第3章 別の場所の者達 その1

ルシア達一行が危険を犯しながらもバリユアス城へなんとか入り込み、しばらく身を隠している頃、ある別の者達はそれぞれの思いを胸に動いていた。

ある者は報告へ、ある者は故郷へと、ある者は野望を抱いて、ある者は不安を抱えて、使命や命令を実行するべく行動していた。止まることを許されない運命は世界を巻き込んでいく。

バリユアス国にいるルシア達に如何なる影響を及ぼすのは、まだ遠い未来のことかもしれないし、近い未来のことかもしれない…。

赤髪の女カインドと金髪の男シールの2人は聖国ドルコルドの間で暗殺部隊である。

カインド達は、先のバロゲニア神殿でのガルド会議で大神官のデスペラドの命を奪った。世間的にはデスペラド4男息子であるグリークスが犯人となっているが、真の実行犯はカインドとシールの2人で、それを指図したのはドルコルド国のマルーン教皇と、ヴィジョンズという大神官の3男だった。

計画では大神官殺しをグリークスに罪を着せて、然るべき刑を執行するはずだったのだが、グリークスが逃げ出したために、カインドとシールはグリークスを暗殺することになった。

ルキボル国での政権争いの時に、グリークスを追い詰めるまでに至ったのだが、失敗し、結果グリークスは仲間と共に旅を続けている。兄のヴィジョンズ、そしてマルーン教皇に復讐をすることを最終目的として。

カインド達は一時期現場を離れた。マルーン教皇への現状の報告するためである。報告が済めばすぐに任務へ戻る。グリークスの命を奪いに。

「…ねえ、カインドお。なんでここなの？ドルコルド国に戻ろうよ
マルーン教皇に話さないといけないんじゃないのお」

シールは面倒臭そうに愚痴を言った。

「うっさい、シール。ここでいいんだ。余計なこと言つな」

カインドも苛々と返事した。

カインド達は、バロゲニア神殿の近くにある村で待機している。

「あやし達が堂々とマルーン教皇に会えるわけないだろう。ちゃんと考えるシール」

いくらドルコルド国の人間とはいえ、マルーン教皇に報告をする
と不味いことになるのは明白だった。どこで誰が何を見たり聞いたり
いるのかわからない。こういう場合は別の者に報告を託することに
なる。

その待ち合わせ場所がこの村だったのだが、いつまで経っても誰
も現れないのでカインドは苛ついていた。早く報告を済ませてグリ
ークス暗殺を実行したいのだ。

「あつ…誰か来るよ」

シールが目ざとく何者かと見つけ、指差した。

「ふん、ようやく来たか」

カインドは溜息をついた。

遠くから非常に落ち着いた動きで歩いてくる者がいる。

老婆だった。

この老婆こそ、ドルコルド国の連絡係である。

「遅いぞ、パラス、モタモタするな」

「あら、あら、キツイ一言だねえ、カインド。こっちは年寄りだつ
ていうのにさ」

パラスと呼ばれた老婆は汚い服を着たまま薄気味悪く笑った。

「久しぶりい、パラスちゃん」

シールが相変わらずの軽い口調で言った。

「あら、あら、シールじゃないかえ。久しぶりだね。元気で暗殺してるかい？」

「うん、ばつちりさ！…あ、でも最近はね…」
「言いかけたシールの頭をカインドが殴った。」

「痛〜！！酷い！酷いよカインド〜！」

シールは頭を抱えながら地面をゴロゴロをのたうちまわった。本当は大して痛くないのだが、パラスの同情を引こうとしてわざと痛がるフリをしていた。

「うっさい！あんたは黙ってな」

「あら、あら、恐いことだねえ、カインド」

パラスは熱いお茶を一杯飲んで、ふうと一息ついた。

「じゃ、聞こうかね、カインド」

「ああ。あたし達はグリークスを追って、ルキボル国へ向かった…」

延々とカインドの説明は続く。余計なことを言ってしまうシールはその間ずっと黙っていた。何か言いたかったが、言えなかった。カインドの目が光っていたからだ。それと特に重要なことでもなかった。

「…というわけで、あたし達はグリークスを追う」

「ようやく長い話が終わった。パラスは静かに聞いていた。」

「カインド、ちよいと聞くが…」

パラスはその場を離れようとしたカインドを引き止めた。カインドは振り返る。

「なんだ？」

「そのルシアって坊やだけだねえ。お前さんの話だと、性格が突然変化したように聞こえるんだかねえ」

「その通りだ。2重人格といってもおかしくない。それに、妙な技で人を簡単に消し殺した」

「なるほどねえ…」

カインドの答えにパラスは考え込んだ。

「なんだ？なにか思うことがあるのか？」

カインドは問う。パラスの返事は少し曖昧だった。

「いや…ちよつと…色々とねえ…」

詰め寄って聞くつもりはカインドにはなかった。ルシアの力は脅威だが、興味が無い。カインドの興味はグリークスただ1人であった。彼女にとって任務が自分の生きがいであり、存在価値を見出せる唯一の方法なのであり、今命令されていることを行うことしか興味がない。

「マルーン教皇への報告は任せたま、パラス。あたし達は行く」

カインドは方向転換して走り出した。

「あら、あら、せつかちだねえ、もう少しゆっくりしてもいいじゃないかい？」

パラスがお茶を飲みながら笑顔で言った。

「そうだよ、カインド、パラスの言う通りだよ。もう少しさ、ここに…さあ…。…わかったよ、行くよ、そんなに睨まないでよ」

シールは慌ててカインドの後を追った。

見送りながら、パラスは呟いた。

「ルシア坊や…かい。きつとマルーン教皇の探している人間だねえ…」

つづく

第4部 第3章 別の場所の者達 その2

アーガス国を目指すために旅をしていた3人。大剣使いで白髪の青年ハツシュ、元ゲルニア国将軍ファミリストン、元部下オキュラス。

山賊を撃退しながら、ようやくアーガス国の領地へ入ることができた。

森の中を抜ければ、ハツシュの師であるクラシェイカの待つ町へ辿り着く。

「剣の国アーガスか…。ハツシュの師匠って凄い人なんだろうな」
オキュラスが話し出した。口数の少ないハツシュとファミリストンを補うためなのか、元々話し好きなオキュラスはよく喋るのだが、結局独り言のようになってしまふ。

「…まあ、凄い人だよ」
ハツシュは呟いた。

オキュラスとしてはどう凄いのかを教えて欲しいのだが、そこまです突っ込めない雰囲気はハツシュにはある。

しばらく歩いていると3人ともが全員異様な空気を感じた。
鈍感なオキュラスでさえもドス黒く重い威圧感で息が詰まりそうになった。

黒い剣を腰にかけ、鎧もなにも纏っていないく、汚い服を着た男が立っていた。鋭い赤い目がハツシュ達を捕らえて離さない。

「…ハツシュ…」
ファミリストンが剣に手をかける。

「いや…これは俺の相手だ」
ハツシュはファミリストンを制した。直感でそう思う。この男は、ハツシュに戦いを挑む気であると。

「…自分は絶望神に仕える四天王の1人、クラシクポードと申す」

男はいきなり名乗った。

「絶望神?? 四天王??」

オキユラスが唸った。

ハツシユが一步前へ出る。

「それで、クラシクポード。俺達に何の用だ」

言い終わるや否やクラシクポードは軽々と羽のように宙を舞った。既に黒剣を抜き襲い掛かる。

「離れろっ」

ハツシユはファミリストーン、オキユラスに向けて叫んだ。

ガキンツ。剣と剣が交わる音。

一瞬早く抜き出したハツシユの大剣でクラシクポードの黒剣を防いだ。

「ほう…さすがだな…ハツシユ…殿」

「それはどうも」

ハツシユは蹴りを繰り出したが、クラシクポードは綿毛の如く軽々とかわす。

「軽い…なんだ、あいつは。体重がないのか？」

見ていたファミリストーンが驚きの声を出す。

「自分はハツシユ殿の力をみておこうと思っ、この場へやってきた」
クラシクポードはふわりと距離を置いて着陸した。

「…俺の力? そんなモノ必要か？」

ハツシユのわざとらしい質問に、クラシクポードは一笑した。

「それは、ハツシユ殿もよくわかっていいるのでは? 絶望神が危惧するのは太陽神。太陽神の仲間が7人の英雄達であるう。その英雄の1人であるハツシユ殿の力をみるのは当然。まして自分と同じ剣の使い手であれば尚更のこと」

「け…結構真面目な奴ですね…。絶望神の仲間のくせに…」

オキユラスが言った。

ファミリストーンも同じことを感じていた。絶望の神は卑怯でずる賢くて絶対的な悪だと教えられてきた。目の前にいるこの絶望神四

天王の1人クラシクポードは堂々と現れて戦いを挑んでいるのだ。

「はっ、俺の力がわかるのか？それで…」

ハツシユが構える。

「ええ、わかる。充分過ぎるほどに」

クラシクポードも構えに入る。

ハツシユがすつと息を吸った。それが合図となった。

背中に寒気を感じた時には、クラシクポードはハツシユの目の前に迫っていた。

「！！！」

「えっ！」

オキユラスが叫んだ。

「速い…！」

ハツシユは体勢を整える。

「ハツシユ殿、貴方は身体よりも大きい剣を扱うことにより破壊力は相当なものだが、接近戦に対応できるだけの速さない」

ハツシユの体勢がクラシクポードへ向けられる前に黒剣がハツシユの喉元へ突きつけられた。

「うっ…！」

「今までの相手は接近戦になる前にその圧倒的な剣で倒してきたと思うが、ここまで速く動くとは予想外だったかな」

クラシクポードは剣を収めた。

「貴方の力はよくわかりました、ハツシユ殿。はつきり言って絶望神の相手にはなりません。世界は我々の勝利となることは間違いない」

とんつ…とクラシクポードは宙に飛び、姿が消えたと同時に気配も消えた。あつという間にいなくなった。

「ハ…ハツシユ…」

心配そうにオキユラスが話しかけてきた。ハツシユが敗れるところなど初めて見た。かなりのショックを受けていることだろうとオキユラスは思った。

「…ん？どうした？」

ハツシユの返ってきた言葉は平然とした返事だった。

「え？あ…いや…落ち込んでるのかな…って…」

「そんなわけないだろ、本気だしてないのに」

オキユラスは啞然とした。

「は？え…そ、そうなの？」

「あそこまで堂々とみておこうって言うってたし、俺達を殺す気がないのはわかった」

ファミリストーンが口を開いた。

「ま、きつと敵さんもお見通しのはずだ」

ハツシユも当たり前のように言った。

「さて…じゃあ…先を進むか」

「それにしても、大変な奴が出てきたもんだ」

ハツシユとファミリストーンは町目指して歩き出した。その姿をポカンとオキユラスは見ていたが、すぐに我に返って追いかけていった。

少し離れた場所で、クラシクポードは考え事をしていた。

「…ハツシユか…。くっ、ふふふ」

クラシクポードは笑い出した。自分も手を抜いていたが、ハツシユもまた手を抜いていたからだ。相手の本気を探ろうとしたのだが、反対に相手も手を抜いてこちらの力を探ろうとしたことを思い出して笑いが出たのだった。

「それでも…まだまだ…だな。しかし…面白く…なりそうだ」

クラシクポードは愉快に笑った。

） 第3章 別の場所の者達 終 ） 第4章につづく

第4部 第4章 ルリードの正体 その1

バリユアス国。

城の中や町の中は混乱していた。

怪しい団体を見かけ、捕らえる状況に陥った時に、バリユアス国の戦士ムトウがその逃亡の手助けをしたのだ。

怪しい団体とは、誘拐された少女アリシエを追ってバリユアス国へきた、ルシアやグリークス達である。

戦士ムトウはアリシエの誘拐にバリユアス国の王ブラウフィッシュが関わっているということを察知したため、彼らに手を貸すことにしたのだ。

だが、それが問題となっている。国を裏切った反逆者としてムトウは罪人になるかもしれない。

その報告はブラウフィッシュ王に届くことはなく、側近となる女、ルリードで留めておくことになっていた。

「ルリードさん、いかが致しましょう」

兵士の1人が不安そうに言った。まさか忠誠心厚いムトウが裏切ると思えなかったからだ。

「…王への報告は私からする。お前は下がれ」

ルリードは静かに言った。黒い短髪の姿は男にも見えるのだが、細く弱々しい身体はやはり女らしい。

兵士を下がらせてもルリードは考え込んでいた。ムトウとの付き合いは上司部下の関係ではあるが短くはない。ムトウのことを良く知っているつもりルリードからすれば、ムトウが裏切るということに納得が出来ない。

「…」

確かに最近の王の横暴さに不満を抱いていたことは知っている。

…ということは行為の裏にはブラウフィッシュ王への疑念も絡んでいるのか。

ルリードの脳裏にすぐ思い浮かんだのは、毎回定期的に城へ送られる赤い馬車だった。ルリードの頭に痛みが走る。彼女はこの赤馬車の意味を知っている。馬車に何が入っているのかも。

手を軽く頭に置いて押さえると古い記憶が蘇ってくる。

ルリードは頭を何度も振り、何事もないように歩き始めた。

戦士ムトウの幼馴染であり同じ立場であるアルヴァニーはムトウ搜索に躍起になっていた。

村でムトウを取り逃がし、更に町の中へ裏をかがれて入られ、姿を消されたのだ。焦らない方がおかしい。

「まだ見つからないのか？ムトウは、さ」

苛立たしくアルヴァニーは言った。町の人間に迷惑をかけるわけにはいかないため、内密で搜索をしているせいもあってか、はかどっていないのが現状だ。

「城には報告がきてないから、さ。まだ町の中にいるはずなんだ。慎重に探すんだ、さ」

アルヴァニーは兵士達に指示をした。

「ムトウ…、どこにいるのだ」

アルヴァニーは呟いた。

「よし、囷になるう」

ムトウが進言した。

現在隠れている町の空き家。忘れ去られた家とはいっても、これだけの搜索が行われている以上見つかるもの時間の問題だ。次なる行動を余儀なくされる。

「お…囷って、ムトウさんが？」

ボズが聞いた。

「他に誰がいる、考えたらよくわかるだろう」

ステューの言葉に、ボズもわかつていると言いたげに睨む。

「そうだな、君らが素早く城の中に入るには、ここで誰かが足止めする者が必要だ。そうなる場所で現れて一番大騒ぎになるのが…」
「ムトウさんということか」

オークランドが言った。

「確かにそれしか手はない。連中は俺達の特徴をまだ把握してないだろうから城へ侵入するには混乱に乗じて動くしかない」

グリークスが続けて同意した。

「さすがに真正面は厳しいでしょう？」

ルシアが聞いた。ムトウは頷く。

「うむ。ここは抜け道を通るしかない。そこは事前に教えておこう」

「よし、もう少しで実行するぞ、準備をしておけ」

話し合いが終わりかけた頃に、情けない声が発せられた。

「あの…おい…俺は…もういいだろ？」

声の主はクラウボだった。港でルシア達に喧嘩を売ってから返り討ちにあい巻き込まれてここまで連れてこられた。話がこんなにも深刻になるとさすがに部外者として関わりあいたくないのが普通の思考だ。

「…」

誰もがクラウボのことなど忘れていたような表情で見つめた。

「おいっ！もういいだろ？俺はここで別れさせてもらうぜ。訳のわからないことに巻き込まれるんは勘弁してくれ」

クラウボは本音をぶつけた。しかし、彼はすっかり忘れていた。

事の原因を作ったのは彼であることを。アリシエを誘拐などしなければこんな事にならなかったのだ。

「…自分のしたことを忘れたわけじゃないよな」

厳しい顔でステューが言った。

「う…。で、でも、十分だろ？償ったと思うぜ、これ以上俺の出来ることなんてねえよ」

子供に言い負かされてたまるかとクラウボは言い返した。

「ま、もういいんじゃないのか。さあ、始めるぞ」
ムトウは軽く言っ立ち上がった。

「お、おい」

他の皆も立ち上がった。

「そうだな…好きにしろ」

グリークスはそう言っ離れた。

「…あ、ああ」

クラウボはあっけらかんとその場に佇んだ。

「いいか…いくぞ」

ムトウは言った。全員が頷く。

扉を勢いよく開けてムトウが飛び出した。

つづく

第4部 第4章 ルリードの正体 その2

突然のムトウの出現にアルヴァニー率いる搜索部隊は慌てた。

たった1人で現れたのだ。ムトウが逃がした怪しい団体、ルシア達はその場にはいない。

「お前1人か、さ。ムトウ」

アルヴァニーが冷静装いながら言った。

「見ればわかるだろう」

ムトウは返す。

「なぜだ？ムトウ。王への、国への反逆だぞ、さ」

「国への忠誠は無くしてはいない」

「同じことだ、さ。怪しい侵入者を匿って、まさか、城へ入れたんじゃないだろうな、さ」

アルヴァニーはムトウを睨む。そこには幼馴染の思いはない。1人の責任者として、犯罪者を裁くつもりである。

「お前は、おかしいと思わないのか？ブラウフィツシュ王の行動にもしかしたら、彼らの探している少女が巻き込まれているのかもしれないのだぞ」

ムトウはその場にいる全員に聞こえるように言った。

ブラウフィツシュ王の行動は確かに疑問がある。赤い馬車の中に何が入っているのか分からないが、隠れながら何かをしている。それも今に始まったことではない。彼が王の座についてからその傾向はあった。ムトウはそれを確かめたかった。もう見て見ぬフリはしなくなった。

「例え、さ。例えそうだとしても。王を疑うなどもつてのほかだ。ムトウ、お前を逮捕する。他の者は、さ。残りの奴らを速やかに探せ、さ」

アルヴァニーは部下に指示をしながら、指の関節を鳴らした。鎧を脱ぎ、上半身裸になった。野次馬の民と傍にいた部下達がざわつ

いた。

「ふははっ、良くわかってるじゃないか、アルヴァニー」

ムトウも笑いながら服を脱ぎ、アルヴァニーと同じ状態になった。「当たり前だ、さ。お前が簡単に捕まるような奴じゃないことはよくわかってる、さ」

アルヴァニーが構える。

「そうだな。力づくで止めてみる…って感じだな」

ムトウは拳を顔元に出して嬉しそうに笑みを浮かべる。

「今までどれくらい闘ったか覚えてるか、さ」

「馬鹿言え、ガキの頃からだぞ、覚えているわけがない。だが、あまり負けた記憶がないがな」

2人の闘いというのは拳で殴りあうことである。それもただの喧嘩ではない。お互いが順番に殴り最後まで立っていた方の勝ちという2人の決め事。殺し合いではない。ムトウとアルヴァニーの喧嘩は拳同士で語り合うのだ。

どんなに心に鬼にしても、昔の習性は直らない。こんな悠長なこととしている場合ではないはずだ。それでもアルヴァニーには別の選択はなかった。

「一撃でケリを着けたいんで、さ。最初にいかせてもらうぞ、さ」
アルヴァニーが前に進み出た。

「ああ、どうぞ」

ムトウはグツと身体に力を入れる。

大きく振りかぶってアルヴァニーはムトウの鳩尾に重い拳を放った。

野次馬達には、ズトン…という音が聞こえたように錯覚する。

「ぐふっ…」

ムトウは息が詰まり崩れ落ちそうになるが、なんとか堪える。

最初の一撃で勝負を決めるつもりだったアルヴァニーからすると驚きを隠せない。過去の中でも最高と自画自賛するほどの拳だったからだ。

「よく堪えたな、さ。お前の番だ、さ」

アルヴァニー八両手を広げて構える。

ムトウは右手を触りながらアルヴァニーの前に立つ。

「お前は…やはり優しいな」

ムトウのいきなりの言葉にアルヴァニーは眉をひそめる。

「何？」

「こっちはどうしても、王の秘密が知りたい。卑怯者と呼ばれても、すまん、アルヴァニー」

そう言つと同時にムトウは、アルヴァニーの顔面を渾身の拳で殴りつけた。

「がっ…」

目の前が弾ける様に光つたかと思うと真つ暗になった。脳が揺れる。吐き気すら覚えてアルヴァニーの意識は飛んで、身体は崩れ落ちた。

2人の殴り合いは顔への攻撃はなしというのが暗黙の了解であった。いつものやり方でアルヴァニーの最初の攻撃はムトウの腹だった。

しかし、ムトウの方がアルヴァニーよりも切羽詰っていた。どうしてもブロウフィッシュ王の疑惑を知りたい。その気持ちだが、暗黙の了解をも超えたのであった。

野次馬は勿論のこと、兵士達も動けない。アルヴァニー以外の者にムトウを止められる者がいないからだ。

「早く手当てしてやれ」

言い残してムトウは再び走り出した。アルヴァニーへの心配もあったが、それよりもルシア達がちゃんと城へ入ることが出来たのだろうか、気がかりであった。

ムトウは城を見上げた。異様な不安を感じ、嫌な予感がしてならなかった。

バリユアス城。城内。

ルシア達は、ムトウに教えられた通りの抜け道から城へ侵入することに成功した。

「お…おい、本当に大丈夫なのかよ」

なぜかこの場にいるクラウボが怯えた声で言った。

散々文句を言っていたクラウボだったのだが、GREEKS達のおっさりした態度に怒りを覚えていた。巻き込むだけ巻き込んで簡単に用なしということに納得がいかなかった。本当は心の中では駄々をこねても無理矢理連れて行かれることを期待していたのかもしれない。

「大丈夫なわけないだろ、不法侵入だ」

GREEKSが当然という表情で言った。

「GREEKSさん」

ルシアが何かを見つけた。

「僕達の行動は読まれていたわけですね」

闇の先を指差す。

その先には、1人の女性が立っていた。

「…あ…」

GREEKSの驚きと焦った声。

その女性とは…ブラウフィッシュ王の側近…。

ルリードだった。

つづく

第4部 第4章 ルリードの正体 その3

「……ル……ルリード……さん」

グリークスは上手く声が出なかった。しかもいつものグリークスではない。自信のある偉そうな態度はじゃない。まるで子供みたいに緊張している。

このバリユアス国へ入国した時から懸念していたことが現実起こってしまった。

彼は、バリユアス国ブラウフィッシュ王の側近であるこの氷のように冷たい表情をしている女性、ルリードのことを密かに想っていた。

ガルド会議が行われたバロゲニア神殿にある宿泊施設で、彼女に食事を作ったことがある。それはルリードへの気を引くために他ならない。

そんなグリークスの変化を感じかない者は1人もいなかった。

「あの……グリークスさん？どうかしましたか？」

心配そうにオークランドは顔を覗く。

グリークスは我に返る。

「えっ、あっ、ああ。彼女はルリードさんと言って……この国の王の側近だ……」

簡単に言うグリークスを全員が凝視した。とんでもない事態に陥っていることに気付かないのだろうか。

「ちよっ……グリークスさん、マズイじゃないですか」

ボズが小声で言った。

ボズでさえ理解できる。王の側近という最重要の位置にいる者が目の前にいるのだ。ボズ達は城の中に不法侵入しているのだ。怪しいこと極まりない。

「……何しにきた……」

ルリードは冷静に呟いた。すぐには捕らえるつもりはないようだ

つたし、彼女1人だけで全員を取り押さえるのは不可能だった。

あまりにも冷静なルリードの態度に一瞬の安堵感が流れる。

「正直に説明をしたらいいんじゃないですか。僕達は攻め込みにきたわけではないですから」

ルシアが言った。ルリードがまずは聞いてくれると判断した上で
の意見だった。

「そ…そうだな。話をとりあえず、聞いてくれ、ルリードさん」

グリークスは両手を挙げて言った。

ルリードはしばらく黙っていたが、「話せ…」と口数少なく言った。

「俺達は、ルキボル国からアーガス国へ向かう途中だった。アリシエという女の子も一緒だったんだが、そこにいるクラウボという奴がアリシエと白い馬を誘拐したんだ」

グリークスはクラウボを指差す。クラウボは恥ずかしそうに下を向いた。グリークスは話を続ける。

「聞けば、この国へ送り付けたと言っじゃないか。俺達はアリシエを取り戻すために、やってきたってわけさ。ムトウっていう戦士に出会って、赤い馬車が怪しいということになった。その赤馬車はこの城へ到着したんだろ？アリシエの行方は赤馬車だと睨んでいる。ムトウの助けを借りてこの抜け道から侵入したんだ」

グリークスは本当に手短かに説明した。

「ルリードさん、赤い馬車のことを知ってるのですか？」

ルシアが横から口を挟んだ。ルリードの表情が一瞬強張ったのを見逃さなかった。あれだけ冷静な彼女が馬車の話をしただけで表情が変わる。何かあるとルシアは確信した。

グリークスがルリードを切望の眼差しで見つめる。確かにルリードへの恋心はある。しかし、今はアリシエを助けることが最大の目的だ。赤い馬車を探すことが大事なのだ。

「……知ってるわ」

ルリードは諦めたように溜息をついた。

ボズが慌てて聞く。

「そつ、その中に、アリシエはいるの！？お姉ちゃん」

「……………ええ」

ルリードの返事と同時にステューの刃と変化した腕がルリードの喉に突きつけられた。

「やめる、ステュー」

オークランドが止める。

「……………どこだ」

ステューがルリードを睨む。ボズと同じくらいの子供とはいえさすが暗殺一族の1人だ。息を呑むほどの迫力ある。

「この先にあるわ。だけど、もう誰もない。連れて行かれたわ」

淡々と話すルリードを見てステューの腕に力が入る。

「案内してくれないか」

グリークスがステューの腕を押さえながら頼んだ。

「一体何のためにアリシエを？」

ルシアが唐突に核心に触れる。ルリードはそこまで知っていると思っている。

「実験よ」

「実験？」

全員が口を揃えた。

ボズとステューの脳裏にある予感が走る。それも最悪の黒い予感。

「どんな…実験なんだ？」

グリークスが聞いた。

「……………と……………の……………」

「え？聞こえなかった」

グリークスが聞き直そうとした時。

「ふざけるなっ！」

ルリードの呟きに反応したのはボズとステューだった。思い出したくもない出来事が2人の記憶を呼び起こす。

そして、ルリードが呟いた言葉。

グリークス達が聞き逃した言葉。

その呪いの言葉をボズが代弁した。

「…絶望獣と…人間の…融合」

しんつと沈黙が全ての時間を止める。

「なんだと？」

時間を進めたのはグリークスの声だった。

「なんだよっ、なんの話だよ」

クラウボが訳のわからない顔でオロオロしている。

絶望獣。バロゲニア神殿を襲った怪物。そんな怪物と人間……アリシエを融合させる？オークランドの頭は混乱した。

「僕の生まれたゲルニア国の王様だったセラミス王は、絶望獣ジャムと人間を融合させる人体実験をしていたんだ。それで作られたのが、強力な人間の意志を持った絶望獣だった。セラミス王自身が絶望獣になったんだよ」

興奮してボズが捲くし立てる。

「俺達一族がその人体実験の被害者だ」

ステューが怒りを抑えて付け加えた。

「そんな恐ろしいことを、ここで、しかもアリシエにやろうとしているのか」

グリークスが初めてルリードを睨んだ。怒りに震えている。

「早く助けましょう」

ルシアが言い、全員が走り出そうとしたが、ルリードがそれを制止した。

「行かすわけにはいかないわ」

「そこをどけ！」

「無理よ。私は、貴方達をこの先へ行かせないように命令されているの」

ルリードはいつもの冷静さを取り戻していた。

「ふざけるな、こんな横暴をあんたは今まで見逃していたのか？がっかりだ、見損なっただぞ」

Greeksが叫び、ルリードの身体に掴み掛かった。
「無理なの。いくら間違っていると私が思おうと。無理なの。命令なの」

「…何を言ってる…」

「そういう命令なの」

ルリードの悲しそうな瞳の奥の思いを Greeksは垣間見た。

「ま…まさか…」

「邪魔する者には…」

言いながらルリードが苦しそうに震えだした。

「そんな…」

ボスの驚愕の声。

「あ…ああ…」

ステューに蘇る悪夢。

「ひいいい」

クラウボの恐怖の叫び。

「こ…これは」

オークランドが感じるルリードの悲しさ。

「畜生！」

何もかもを悟った Greeksの悔しさの声。

「そういうことですか。ブラウフィッシュ王には逆らえないということ…」

この場で起こる出来事と、今までのルリードの言動で全てを理解できたルシアが言った。

ルリードの身体が変化していく。

かつてない絶望を生んだあの怪物に。

キシヤアアアアア。

ルリードは絶望獣へと変化していった。

つづく

第4部 第4章 ルリードの正体 その4

グリークスがルリードを初めて見たのは、5年前のガルド歴905年バロゲニア神殿で行われたガルド会議の時だった。

グリークスは重要な役回りではなかったし、ルリードも王の側近ではなく、ただ連れてこられたというだけで、お互いさほど意味のある立場ではなかった。

5年前のルリードは今と変わらず冷静な表情でその場にいたのだが、その姿にグリークスは一目惚れした。

グリークスが嫌々ながらも神殿の手伝いをずっと続けてこられた理由の1つとしてルリードに会いたかったことが挙げられる。

話すことはなく、見ているだけの存在。いつか言葉を交わすことを思い描きながら5年後、ようやく話しかけることができた。

しかし、5年という歳月は2人を成長させたと同時に2人の状況を一変させる。

グリークスは重要な仕事を。ルリードはブラウフィッシュユ王の右腕として。

更に、父親殺しの犯人として無実の罪で追われる身になったグリークス。幼い子を誘拐した国の疑惑を抱えて対峙するルリード。

1つの結論が出ようとしていた。

ブラウフィッシュユ王がアリシエを誘拐させた真の理由。好色変態に相応しく如何わしい行為に走るわけではない。もつとタチが悪い。

実験。人間と絶望獣の融合。それにより出来上がる「モノ」は。絶望獣の遺伝子を含んだ人間。圧倒的な力を持った怪物。

ブラウフィッシュユ王が実験に励んでいたのは、かつて滅亡したゲルニア国王セラミスが行っていた邪悪なる悪魔の所業。

その答えが、グリークスの目の前に、いる。ルリード。

細く白い身体が、瞬く間に膨れ上がり、服が破れ、醜い姿へと変

化していく。

それこそ、古の怪物。絶望神メンデルゴスが操る化け物。絶望獣
ジャム。

再び、絶望の獣は、目の前に現われた。

「……」

まるで蛇に睨まれた蛙のように、グリークスは動けなかった。見
たくない光景。見たくない現実。

好意を寄せていた女性が、絶望獣へと変化したのだ。言葉になら
ない。なるわけがない。

自然と身体震えだした。恐怖にはない。ルリードの姿に対して
の悲しみの想い。彼女は望んだのか？彼女が目指した姿なのか？

「グリークスさん、とにかくここから離れるんです」

オークランドが無理矢理グリークスの重い身体を引っ張った。

「辛い気持ちはわかります。ですが、今は引きましよう。さあ、グ
リークスさん」

オークランドは必死で叫ぶが、声は届いていないふうだった。

「ボズ、ステュー、早く」

思い出したくなかったのだろう。今までどんな困難にも勇敢に向
かっていた2人は突然の出来事に思考回路が付いていっていないよ
うだった。

「…う…あ…」

「そんな…なんで…」

数々の修羅場を通った2人である。時間をかけて落ち着かせれば
対応できるが、今は一刻も速い行動が求められる。呆けている場合
ではないのだ。

「くっ…ク…クラウボ！子供達を…」

こうなったら頼りないがクラウボに応援してもらうしかない。オ
ークランドはクラウボを探した。

だが、その考えは簡単に破綻する。

確かに小さな港の中で、自分が世界で一番だと嘯いていても、世に出ればこういった有り得ない出来事に出くわすこともある。クラウボにしてみれば、今回の一連の出来事は人生で初めての初体験尽くしの出来事だった。最後の最後で昔話で聞かされていた絶望獣の登場である。意識が遠のき気絶するのは至極当然であった。

残された者は、後1人。ルシアだけとなった。

オークランドはルシアの方を向く。

「ル…ルシ……」

呼びかけてオークランドは絶句した。

あの誰よりも冷静なルシアがその場で頭を抱えながら屈みこんでいる。

「ルシアっ?! どうしたんだ」

「う…。うっ…」

ルシアは苦しそうに唸った。

「ルシア…?! …… ああっ!」

蘇るオークランドの記憶。

母国ルキボル国での記憶。

ルシアの身体に宿りし危険な存在。

ルシアは多重人格者である。それも2重いや3重人格。実に稀ではあるがそういった人間もいる。問題は。ルシアの中に棲んでいる人格が問題なのだ。

1人は、太陽の神、太陽神アルニヴァース。世界の人々が永遠の神として崇める太陽神の人格がいる。

やっかいなのはここからで、もう1人の人格は、絶望の神、絶望神メンデルゴス。かつて、太陽神と戦い敗れ封印された最凶の悪魔。その絶望神の人格。

ルシアという1人の身体に、太陽神と絶望神の2人の人格が宿っているのだ。これほど深刻でややこしい問題はない。

「ま…まさか…。絶望獣の出現で…」

オークランドは考えたくもないことを思った。絶望獣ルリードの登場で、ルシアの中にある絶望神の人格を触発したのではないだろうか。そうなると、絶望神の人格が現れる。

オークランドは絶望神ルシアの容赦ない攻撃を一度目の当たりに行っている。人を人と思わず、まるで虫をあつさり殺す程の残虐性。ここで絶望神の人格がルシアを乗っ取るのは致命的に等しい。

「うっ……うがっ……うがあああ」

頭を抱えながらルシアが暴れだした。全身を痙攣させて地面をのたうちまわっている。ルシアの人格と絶望神の人格が戦っているのだ。

「ルシアっ、頑張れっ！負けるな」

オークランドには激励をかけるしか道はなかった。

そして。

「気付いた時には遅かった。」

絶望獣となったルリードの鋭く大きな腕が、オークランド達全員を吹き飛ばした。

壁に激突したオークランドは崩れ落ちていく仲間達を視界に入れながら自分自身の意識がしばらくの間機能しないことを悟った。

） 第4章 ルリードの正体 終 ） 第5章に続く

第4部 第5章 アリシエを救出せよ その1

冷たく、薄暗い部屋に少女はいた。

感情も出せないその少女は何もわからないままこの場所へいとも簡単に連れてこられた。

「……」

旅の途中で誘拐され、船に乗され、赤い馬車に乗されて、到着したのは城の地下。

少女はアリシエ。ボズやルシア達と一緒に旅をしていた。

故郷のゲルニア国に突如として現れた絶望獣ジャムによって目の前で両親を殺された。その結果、アリシエは言葉と感情を失った。

それでも幼馴染のボズはアリシエを助け、気遣い、いつか戻るかもしれないその感情を待っている。

ルキボル国でボズに見せた表情は治る前兆なのだろうか。

水滴の音がやけに大きく響く。

アリシエは自分がこの場にいる理由も理解できないまま、その場に座り込んだ。

「くっそう！」

厚い鉄の扉をボズは力いっぱい蹴った。…がびくともしない。

逆に痛みが徐々にボズお足に伝わる。

「無茶は駄目だ、ボズ」

オークランドが止める。

バリュアス国プロウフィッシュ王側近のルリードが絶望獣に変化したという予想外の展開。気絶させられ全員が今いる牢へ閉じ込められた。

救いだっただのはルシアの乱れを止めることができたからだ。絶望獣の出現でルシアの中にある絶望神の人格が覚醒しかけたのだった。

気絶させられたおかげで止めることができた。

「このままだと、アリシエが！アリシエがあんな怪物にされちゃうよー！」

グリークスのルリードを想う心情からいえば、ルリードを怪物呼ばわりする言動は避けた方がよかったのだが、今のボズにそんな気配りはできない。

それに嘘ではない。あの氷のように冷静で美しいルリードはおぞましく醜い絶望獣なのだ。

「まずはここから抜け出さないとな」

グリークスは呟いた。

「何か方法はあるんですか？」

オークランドの問いにルシアが答えた。さきほどの乱れはなく、いつものルシアだった。

「完全に密室にすると僕達は息が出来ません。つまりは空気口があるはず。上を見てください。あの小さな穴がそうです」

全員が上を見上げた。確かに子供が入れるくらいの小さな穴がある。

「確かにあるな。だが子供しか入れないぞ」

グリークスはそう言いながら、ボズとステューを見た。

2人の子供は動じることもなかった。むしろボズがやる気満々に立候補してきた。

「だったら、僕が行くよ。そこから抜けて表から鍵を開ければいいんだね」

ボズは顔を真っ赤にして喋る。一刻も早くアリシエを助けなければならぬと思いでいっぱいだった。

「お前はそこにいる。俺が行く」

ステューが横から口を出した。ボズが睨む。

「なんだよ！こっちが先だぞ！」

「穴から外に抜けるとして、もし敵がいたらどうする？鍵を兵士が持っていたら？俺の方がお前よりも対応出来る」

ステューは淡々と言った。

「なんだと！僕じゃ無理だって言うのかよ！」

「勘違いするな。お前が頼りないと言っているんじゃない。そういう状況になった場合、可能性として俺の方が早く対応出来ると言いたいんだ。今は一刻を争う時だろ？」

「え…あ…ああ」

ボズは驚いた。ずっと自分を否定してきたステューがこんなことを言うなんて。長い旅でボズを見てきたステューの気持ちも変わってきたことと、アリシエを無事に助けるといふ目的は同じだからなのだろう。

「うん、僕もそれがいいと思うよ。頼む、ステュー」

オークランドを先頭に全員の意見が一致した。

「けっ、じゃあ、お前に任せるよ。…気をつけるよ」

ボズの精一杯の気遣いに、ステューは誰にもわからない程一瞬笑みを浮かべた。

「お前じゃないんだ、大丈夫に決まってるだろ」

「…うぬぬ！やっぱ…こいつ」

ステューは身軽に飛んで穴の中へ入っていった。

全員がステューを送り出している場面を隅っこで見ていたのはクラウボだった。

クラウボは後悔している。

バリユアス国に協力していたこと。アリシエを誘拐したこと。グリクス達に捕まり、バリユアス国へ同行させられたこと。お尋ね者になり、追われる身になったこと。見たこともない化け物に襲われ、今この場にいるということ。

…どれも違う。

根本的なことを後悔していた。

自分の生き方にある。

振り返れば、迷惑ばかりをかけていた。漁師をしてる親を否定し、赴くままに好き勝手生きた。その結果がこれだ。

父の手をちゃんと見た事があつただろうか。大きくて傷の多い手。誇りを持って生きている親の顔をまともに見れなかった。見たくなかった。逃げていた。

ここにグリークスはどうだ。こんな状況でも諦めずにアリシエを助けようと努力している。自分よりもっと若い子供までもが。

クラウボは覚悟を決めた。生まれて初めて本気で心の底から決めた。自分で撒いた種だ。自分がやったことだ。最後にケツを拭くのも自分の責任だ。

クラウボの内に秘めた思いが気持ちを高めた。

つづく

第4部 第5章 アリシエを救出せよ その2

バリユアス国の兵士ハンスは牢の見張りを命じられていた。

噂になっていた侵入者をブラウフィツシュ王の側近ルリードが捕らえたということであらに閉じ込めることになった。

牢の扉は頑丈で、壊すことなどは簡単に出来ないし、施錠もしっかりとしている。

万が一ということがあってもかもしれないのでハンスは見張っているのだった。

ハンスはあまり噂を気にする男ではない。ブラウフィツシュ王の怪しい奇行に対して戦士であるムトウが疑問を抱いているという話は聞いていたが、ハンス本人はなんとも思っていない。そんな噂勝手に想像してろ、という勢いである。

一瞬、空気口の小さな穴に影が見えた。

見間違いかと思いつながらハンスはその空気口へ足を向けていた。

そんなはずはないと心の中では思っているけれども、実際空気口は牢の方にも繋がっている。

不安を感じながらゆっくりと近づいていく…。

やがて。

不安は見事に的中した。

子供の頃から変だと感じた時には必ず悪いことが起きていた。一種の予知能力とでもいうべきだろうか。とにかく不安を感じたら間違いない何か悪いことが起きる。

空気口から男の子供が飛び降りた。

牢の中にいる一味の1人、ステューだった。

ハンスが声を出す前にステューが懐に飛び込んできた。気付いた時には、ステューの当て身がハンスの意識を奪った。

ハンスはこれから起こるバリユアス国最大の事件に触れることなく倒れた。意識を取り戻した時どう思うのだろうか。それは本人し

かわからない。

ステューはハンスの持っていた鍵を取り、いとも簡単に牢の扉を開けた。

同時にボズが飛び出した。

「いくよ！早く！」

何処に行けばいいのかわかっていないが、気が気でならない。それは皆同じ気持ちである。

「落ち着けボズ、まずこの場所を把握しなければ……」

オークランドの意見を無視してボズはウロウロしている。ここで別の兵士に見つかる大変なことになるため、ボズの行動は危険極まりない。

「オークランド、今のボズは誰の声も聞こえないぞ」

諦めたようにグリークスは言う。

「ここは、もうボズに任せるしかないですね」

ルシアが言う。

勅を頼りにどんどん先へ進むボズの後を皆が付いていった。

「ぶわっはは」

ブラウフィッシュ王は満面の笑みを浮かべていた。決して美しい笑顔とはいえない。

大臣が現れて、ブラウフィッシュ王に耳打ちした。

「準備が整いました」

ますますブラウフィッシュの顔が醜く歪む。

「そうか、そうか、じゃあ、行くかの」

ブラウフィッシュは立ち上がった。隣で佇んでいたルリードを見て叫ぶ。

「ルリード！ムトウの奴は捕らえたか？！」

「いえ。まだです」

「むうつ。アルヴァニーのボケは何をしておるんだ！」
鼻息荒くブロウフィッシュは何度も地団太を踏んだ。

「それと、例の実験台の仲間を牢に入れたと聞いたが？」

「はい。問題ないかと思えます」

「ふん。まあいい。とにかくいくぞ。ルリードお前も来い」

ブロウフィッシュは歩き出した。アリシエがいる場所へ。

ルリードも無言で歩いていった。

ルシア達が城への抜け道を使って入った場所からムトウも忍び込んだ。
人の気配がしない。シンツと静けさが不気味に感じる。

ルシア達は無事だろうか？アリシエを助けることが出来たのだろうか。
辺りを見回していると、ブロウフィッシュ王とルリードが通り過ぎるのを見た。ムトウは思わず隠れる。

あのニヤけたブロウフィッシュの顔を見るとアリシエはまだ救われていないことを悟る。
つまり、ブロウフィッシュ王の後に続けば、アリシエの所に辿り着くということになる。

ルシア達がいけないのが気かりだが、今はアリシエを助けることを最優先にするしかない。
ムトウは気付かれないように、後をつけた。

「王はどこにいったの、さ」
城に戻るやいなや、顔を腫らしたアルヴァニーは大臣に詰め寄った。

ムトウに殴られて倒された。アルヴァニーは怒っていた。ムトウ

とアルヴァニーの鬨いは顔を殴ることはご法度だったのだ。

ムトウはそれを裏切った。見事にアルヴァニーの顔を目掛けて重い一撃を食らわしたのだった。

アルヴァニーの怒りはおさまらない。ムトウにしかるべき報いをそこに幼馴染という感情は存在しなかった。

王の行動を疑っていたムトウは必ずブロウフィッシュ王のいるところに向かうはずだと推理したアルヴァニーは王の所存を聞きだそうとしていた。

「た…確か…地下へ…」

アルヴァニーの迫力に大臣は簡単に口を割った。所詮王への忠誠心などそんなものだった。

「地下？なぜ地下なんだ、さ」

アルヴァニーは地下へ向かった。その瞬間、ムトウが抱いていた不安な疑惑が脳裏を過ぎった。

つづく

第4部 第5章 アリシエを救出せよ その3

重い扉が勢いよく音を立てて開かれた。

誰もが驚く音であったが、中にいたアリシエは聞こえていないのか、意識が別世界へ向かっていたのか全く動きもしなかった。

ブラウフィツシュ王はイヤライシその顔をアリシエに向けた。

「おう、おう、おう。大人しく待っていたのかあ、良い子じゃのう、ぶわっははは。久しぶりの実験体じゃのう」

耳に入れば誰もが背筋に寒気を帯びる声もアリシエには聞こえない。ブラウフィツシュにとってそれは好都合であった。

泣き叫ぶのか当たり前の状況で感情も出さない者ほどやりやすいことはない。ましておぞましい実験台に使うのだ。

地下の部屋には、肉片が入っている大瓶があり、その瓶に管が取り付けられている。管の先は人が1人入れそうな筒状の箱に繋がっている。

箱の中に実験台となる人間を入れ、禁断の融合呪文を唱えることにより、人間と絶望獣の融合を完成させるのだ。肉片とは絶望獣の一部だった。

かつて、今は無き北のゲルニア国の王セラミスが用いた方法だった。

セラミスの所業は有名で、どのようなやり方で実験を行っていたのかなど簡単に手に入れることの出来る情報だった。

方法さえわかれば、あとは一国の王である、準備などに時間がかかるはずもない。

「さてえ……」

ブラウフィツシュはにやついた。

「ルリード、準備をせい」

その場に無言で立っていたルリードに命令をした。

ルリードはしばらく動かなかつたが、やがて準備に取り掛かろう

と足を動かした。

その時。

「そ…そんな…馬鹿な…」

聞き覚えのある声が響いた。

「…」

ルリードは静かに振り向く。

「あぁ…ん？」

ブロウフィツシユも怪訝な表情で同じように声の方向を見た。

「…王、本当だったんですね…」

声の主は、後を付けていたムトウだった。

「ぶわはは、ムトウか、今更ノコノコと何をしにきた」

ブロウフィツシユの叱咤が飛ぶ。

「王、あの少女を使って何をしようとしていたのですか」

心なしかムトウの身体は震えている。怒りを抑えているかのよう
だ。

「ぶわっははは。なんでもない、ちょっと遊ぶだけだ」

ムトウはブロウフィツシユの一言一言に頭の血管がピクピク脈打

つを感じた。

「遊ぶ…？」

「実験だよ、実験。未来を見据えた実験じゃよ、ぶわっははは」

愉快にブロウフィツシユは笑ったが、一瞬で真顔に戻った。

「それで？まさか邪魔をするとか言うんじゃないだろうな？ムトウ
よ」

ムトウは我慢の限界だった。

「……けるな！」

「は？なんじゃ？ムトウ？」

「ふざけるなあっ！」

ムトウは叫んだ。叫びながらブロウフィツシユに殴りかかってい
った。

「おう、おう、おう、この王であるワシに逆らうのか、ムトウ！」

ブロウフィッシュは馬鹿にしたように襲い掛かるムトウに満面の笑みを浮かべる。

「この…っ！ケダモノめ！」

ムトウは人生で最大で最高の渾身を込めた拳を我が国の王に食らわせる覚悟を決めた。権力と肩書きだけで国の王として君臨していた浅ましき人間にどんな力があるというのか。

ムトウは一撃でブロウフィッシュを倒すことを悟る。ルリードはその後だ。今はどちらに付いているのかわからないからだ。

「ところで、言っておかなかったがな、ムトウ。ワシには奥の手があつてなあ」

ブロウフィッシュの両手が突如怪しく輝いた。

瞬時にムトウは理解する。その輝きはなんなのかを。魔法の輝き。それも攻撃魔法。一体どこで覚えていたのだ。覚える余裕はなかったはずだ。しかし、その事実をムトウは受け入れるしかなかった。

両手の灰色の輝きは衝撃波の魔法。ブロウフィッシュは両手を迫り来るムトウにかざした。本来この魔法は非常に鈍く発動したとしても簡単に避けられるだろうが、ムトウが一直線に向かってきている今、避けられる要素はない。

「自分から来るとはのお〜」

ブロウフィッシュの憎悪詰まった両手から強烈な衝撃波が出された。

ズドン。

衝撃波はムトウの身体に命中して貫いた。

「ぐはあっ！」

勢いでムトウは吹っ飛び壁に叩きつけられた。

「悪かったなあ〜ムトウ〜。ぶわっはははは」

ムトウの意識は失っていた。

ブロウフィッシュは続きを始めようとアリシエの方を向いたが、すぐに溜息をついた。

「なんだ、今度はお前か…」

目の前に立っていたのは。

ムトウを探していたもう一人の戦士、アルヴァニーだった。

「どういうことですか、王。ルリードさん。どういふことなんですか、さ」

真っ青になってアルヴァニーは言った。

ブロウフィッシュは両手を再びかざしながらアルヴァニーに向かって歩き出した。

つづく

第4部 第5章 アリシエを救出せよ その4

「どういうことなんですか？ブロウフィッシュ王?!」

アルヴァニーは叫んだ。混乱している。

ムトウを探しにここまで来た。ようやく見つけたかと思ったら、ムトウはブロウフィッシュ王に殴りかかっていた。

それだけではない。そのムトウを手加減なく吹き飛ばした王。確かにムトウの行動は尋常ではなかった。ブロウフィッシュ王がああしなければ逆に大変な目にあっていたのは王の方だっただろう。

しかし。冷静に立っているルリード。呆けた表情でただ座っているアリシエ。部屋の中の奇妙で怪しい実験道具。

部屋の雰囲気と状況がそうではないことを物語っていた。決してムトウは我を失っておこした行動ではなかった。むしろ、王のこれからするべきことが、人の道から外れているのではないだろうか。

幼い少女。実験設備。想像もつかない。なにも思いつかないが、異様な雰囲気を感じていた。

「なんだ、アルヴァニー。なにか用か？」

ブロウフィッシュは巨体を揺らしながら近づいてきた。

「お…王、これは一体…なんなのですか、さ」

近づいてくるブロウフィッシュに動揺しながらもアルヴァニーは冷静さを保つように努力した。

「なあに。見てわかるだろうが、反逆者のムトウを捕まえたただけだ。お前はムトウを牢獄に連れていけばよい」

醜い顔と臭い息を発しながらブロウフィッシュはにんまりと笑った。その迫力は背筋に緊張がはしると同時に、アルヴァニー自信の身の危険を察知する程だった。

「だ…騙される…な。ア…アルヴァニー」

ブロウフィッシュの攻撃によって吹き飛ばされ、壁に激突したはずのムトウの声が響いた。まだ意識はあったのだ。

「ムトウ」

「良く見るのだ…そして感じるんだ、アルヴァニー…。この…状況を。お前ならわかるはずだ」

それはアルヴァニーが疑問に思っていたことの全てだった。同じことをムトウは言っているのだ。

ブラウフィッシュ王の禁忌。実験。それは。幼い少女を使ったおぞましい真実。

アルヴァニーの動きは素早かった。ブラウフィッシュの横をすり抜けてアリシエの方へ向かう。ブラウフィッシュの贅肉の塊である身体はアルヴァニーの動きについていけるはずはなかった。

「アルヴァニー！貴様までもが、裏切るといふのかあ！このクソガキめえ！」

ブラウフィッシュの叱咤。

お構いなしにアルヴァニーはアリシエを抱きかかえた。

「ルリードオ！」

ブラウフィッシュの叫び声にようやく沈黙のままだったルリードが動いた。美しく細い身体はしなやかに、そして軽やかにアルヴァニーの前に立ち塞がる。

「その子を離しなさい」

氷のルリードという言葉されるだけの冷ややかな声がアルヴァニーに突きつけられる。

「…いくらルリードさんの頼みでも、さ。こればかりは聞けないです」

アルヴァニーは身構えた。実際、アルヴァニーに頭にはルリードのことは何とも思っていないかった。側近といっても軍事の戦力ではなく、政治の方で野戦力としてだ。闘いに入ると男と女。どちらが有利かは自ずと見える。それはムトウも同じ考えであった。

結果。その考えは。甘かった。

「ぶわっはははあ！見せてやれいルリード。お前の本当の姿をお！」

「えっ？」

勝ち誇ったブロウフィッシュの宣言にムトウとアルヴァニーはほぼ同時に声を出した。

ルリードは静かに目を閉じて、精神統一を始めた。段々と苦しい表情に変わっていく。

びびびっ。

ルリードの衣服に亀裂がはいる。筋肉が膨張している証拠だった。
「なっ…なんだ」

筋肉の膨張だけではなかった。ルリードの身体自体がありえない程の大きさに変わっていく。美しかったあの容姿の面影は全くなくなっていた。

「そ…そんな。こんなことが…」

何倍にも変化していく。ルリードの身体が。神話の伝説である怪物の姿に。絶望の獣。絶望獣ジャムという姿に。

「ぶわっははは。我が実験の最高傑作ルリードよ！あの裏切り者を抹殺せよ！」

ブロウフィッシュの号令が下った。変化が完全に終了したルリードはブロウフィッシュの命令が聞こえているのだろう、しっかりとした視線でアルヴァニーを睨んだ。

アルヴァニーはアリシエを離して距離をとった。巻き込まれて被害があると困るからだ。そして戦闘態勢に入る。例え相手が化物でも返り討ちにしてやると心の中で誓う。

「行けい！ルリード！」

キシヤアアアアアアアアアアアア！絶望獣特有の雄叫び。

瞬間。絶望獣ルリードの動きがアルヴァニーの目にも止まらなかつた。

「まずいつ！逃げる！アルヴァ…」

ムトウが叫んだ時には、遅かった。

アルヴァニーの強靭な身体を持ってしても、絶望獣の太い腕に耐えることは出来なかった。

防御も出来ないままに、アルヴァニーは絶望獣ルリードの一振りを脇腹へまともに浴びた。

「がっ……」

息が詰まったかと思うと唾液とは違う粘っこい液体が口の中に溢れたことを感じ取る。胃液が逆流し、赤い液体も口から飛び出た。

アルヴァニーは吐血した。更にかつてない激痛が駆け巡る。感覚で肋骨が数本折れたのがわかる。折れた骨が内臓の何処かを傷つけたのか、口から出る血が止まらない。

「アルヴァニー！」

ムトウは叫ぶが、ムトウ自身もそう簡単に立ち上がることが出来なかった。それだけブロウフィッシュの衝撃魔法の威力は凄かったのだ。

「ぐっ……ぐっ」

アルヴァニーの意思とは別に身体が動かない。痙攣して立ち上がることもままならない。

「ぶわっははは。さあ、ルリード、この逆賊達を始末せい！」

ブロウフィッシュの指示に絶望獣となったルリードは言われるままの機械のようだった。静かにムトウへ向かって歩き始める。

ムトウは動けない。いや、動きたくとも動くことができないのだ。

「ぐっ……」

鋭い爪が振り下ろされた。

ズンッ！

無情にも死を呼ぶ絶望の爪は身体を貫いた。

『アルヴァニー』の身体を。

「……！なっ……アルヴァニーイイー！」

最後の力を振り絞り、アルヴァニーはムトウの代わりに盾となったのだ。

アルヴァニーの口から更に大量の血が溢れる。絶望獣ルリードの5本の爪は心臓の位置を含めて正確に胸元を貫いていた。

誰が見てもわかる。それが致命傷だということを。

誰が見てもわかる。それがアルヴァニーの最期だということ。

「馬鹿野郎！なんで！なんで！」

ムトウが叫ぶ。

「ふ…ふふ。なんで…だろう…な。お前を…信じていなかった…罰
つてやつ…さ」

「アルヴァニー！」

「わ…悪かったな…さ。ムトウ…。だ…だがな…あんな怪物となっ
てるが…ルリードさんは…悲しんでいる。この身体を貫いた爪から
伝わってくるんだ。ルリードさんの悲しみが…。ムトウ…ルリード
さんを…助けて…やつ…」

アルヴァニーが言い終わる寸前、ブrouフィッシュの衝撃魔法が
アルヴァニーに直撃した。アルヴァニーの身体は吹き飛んだ。

「あ…」

ムトウの呆けた声と同時にアルヴァニーの命の灯火は永遠に消え
た。

「ぶわっはははは。反逆者はこうなるのじゃあ！」

「ブrouフィッシュウウウウ…！！！！」

ムトウは張り裂ける程の声で怒鳴り、立ち上がるようにするが、立
てない。立つことができない。悔しさが溢れ出る。死に逝く友に何
も出来ずにいた自分自身に怒りがわく。

「ぶわはははは。そんなに悔しいのかあ？心配するな、ムトウ、
すぐにお前もアルヴァニーと同じ所に送ってやるわあ」

ブrouフィッシュはルリードの方を向く。

「やれ、ルリード」

キシヤアアアアアア！

ルリードは吠えた。ムトウへ凶器の爪が降りかかるようにした。

「やめるんだ、ルリード！」

別の声。ブrouフィッシュの命令しか聞かない絶望獣ルリードの
動きが止まる。

「ぬう、お前…たしか…父親殺しの…グリークス」

ブロウフィッシュの憎しみ混じった表情を出す。
その声は、グリークスだった。

つづく

第4部 第5章 アリシエを救出せよ その5

「お前」

ムトウが擦れた声で言った。

絶望獣となったルリードの動きを止めた声の主。

グリークスだった。

「貴様あ…。よくもこのワシの国にノコノコと…どういっつもりだ。この親殺しめ」

ブラウフィツシュは睨みをきかせる。

グリークスの後ろから、もう1人。ブラウフィツシュの見覚えのある人間の姿が現れた。ブラウフィツシュは驚愕した。確かに今回の実験台であるアリシエを助けにきた仲間がいることは聞いていた。しかし、その仲間がグリークスだとは思っていなかった。更に、先のガルド会議で席を共にしたルキボル国王子オークランドだと思っ
ていなかった。

「オークランド…王子…。いや…今は、オークランド王が。先日のお家騒動大変でしたなあ。だが、なぜお前がここにいるのだ」

ブラウフィツシュは怒りを交えてオークランドに一喝した。少し前のオークランドならば尻込みしていたはずだ。

ルキボル国内での戦争で王として成長していたオークランドは最早臆病で弱い男ではなかった。

「今はそんなこと関係ありますか？ブラウフィツシュ王。貴方は我々の仲間を誘拐し、如何わしい実験をしようとした。しかも知らないと言っていた絶望獣までもこの場にいる。質問したいのはこっちの方です。これをバロゲニア神殿が聞いたらどう思うでしょうか」
軽く見ていたオークランドの脅迫めいた発言にブラウフィツシュは逆上した。

「それがどうしたあ！貴様らがここで死ねば問題なかるう！まあ、最も親殺しを引き連れている時点で誰も信じてくれないだろっかな

あ

そう言ってブロウフィツシュはグリークスを指差した。

「とにかくアリシエは返して貰う。そして、ルリードを元の姿に戻す」

グリークスはブロウフィツシュを無視して言った。

「ぶわははは、やれるものならやってみるがいい！ルリードオ！こいつらを皆殺しにしるお！」

ブロウフィツシュは叫んだ。

ルシアとステュー、そしてボズは離れた場所で待機をしていた。

ステューは追っ手がきた場合にボズ達を守るため。

「ルシアは前に絶望獣の影響で異変を起こしたために連れて行くことは出来なかった。ルシアの身体に宿っている人格。絶望神の意識が現れるのだ。」

「なんで僕は駄目なんだよ！僕だってアリシエを助けに行きたいのに！」

ボズは悔しそうに言った。

その横でステューが溜息をつく。

「お前を連れて行ったところで足手まといになるだけだ」

「なんだと！ルキボル国での勇姿をもう1回聞かせてやろうか？」

「聞き飽きた」

言い合いが酷くなる前にルシアが止める。

「2人とも、アリシエを助けに行きたい気持ちは全員一緒ですから。」

「ここはグリークスさん、オークランドさんに任せましょう」

仕方ないとボズは誰かがいないことに気付いた。

「あ…あれ？あいつは？」

「…クラウボか」

同じ様に気付いたステューも探し始めた。

「まさか逃げたのか？」

ボズは怒りを露わにした。

クラウボはグリークスがいる部屋を目指していた。ルシア達から隙を見て離れたのだ。クラウボの目的は一つ。アリシエの救出だった。自分の責任でこうなったのだ。罪滅ぼしとしてアリシエを助けてみせる。その想いだけだった。

もしかしたら、死ぬかもしれない。覚悟には勇氣がいる。クラウボにはそこまでの勇氣はない。それでも進む足は止まらない。

「どうした？ルリード。こいつらを殺せ！」

ブロウフィッシュの命令が部屋に響く。

異常が起こっていた。絶望獣ルリードが命令に従わないのだ。全く動かない。

「ルリードさん……」

ムトウは呟いた。死に際のアルヴァニーの言葉は当たっていた。ルリードは悲しんでいる。

この「獣」という姿が彼女自身望んだ形ではないことは明白だ。若い女性がおぞましく醜い姿になることがどんなに辛いことか。

ルリードは今、必死で自分の意思と絶望獣の意思との戦いをしていくのだ。

「目を覚ましてください！ルリードさん！」

「黙れ！ムトウ！」

ブロウフィッシュの蹴りがムトウの腹を刺さる。

「ぐはっ」

「ぐぬぬう。ルリード！何をしておる！ワシの命令が聞けないのか？こいつらを殺すんだ！」

ブロウフィッシュの命令を聞くこととする意思でルリードの身体ピクピクと動く。それを阻止するもう一つの意思が止める。

「やめろ！ブロウフィッシュ王」

オー克蘭ドが叫ぶ。

「うるさい！ワシの作ったモノじゃ！最高傑作だ！ルリードはワシ

のモノじゃ!」

ブロウフィッツシュが脂汗を出しながら抵抗する。

「ふざけやがって…!」

グリークスが前に出た。

「ルリード! こんな変態野郎の所にいつもまでもいることはねえ!

戻って来い! 俺がなんとかしてやる! 俺がお前を助けてやる!」

グリークスがルリードに近づいていく。

「グリークスさん!」

「馬鹿が! この親殺しが! ワシのルリードを助けるだとお?!」

ポツン。

異変が起こる。

獣となったルリードの目から涙が落ちた。

「俺と一緒に来い!」

グリークス魂の、心の、叫び、想い。

キシャアアアアアアアアアアアアアアア!

誰の耳にもルリードの咆哮が悲しく聞こえた。

） 第5章 アリシエを救出せよ 終 ） 第6章につづく

第4部 第6章 ルリードの過去 その1

当時のバリユアス国はまだ発展途上で裕福な者と貧困な者で分かれていた。貧しい者が食べていくには奴隷のようなことでもしないかぎり食べていけない。女性の場合は身体を売って家族や自分を養っていく。

ルリードの母親は貧困の人間だった。それも、母親として、決して良い母親ではなかった。彼女も身体を売っていたが、それは快樂とその場しのぎの金が欲しいだけであり、妊娠がわかって、子供を養っていくような経済力も常識もなかった。自分のことしか考えない彼女はルリードを産み落とし、そのままルリードを売り出したのだ。ルリードは親の顔も、愛も分からぬまま「物」として競売に出されたのだった。

運が良かったのか、ルリードを買った人間は、何年も子供が出来ない貴族の老夫婦だった。ルリードの名付け親である。子供のいなかった老夫婦はルリードを買い、残り少ない人生の全てを懸けてルリードを愛した。その愛を受け、ルリードは2歳になり、これからの将来が幸せになるかのように見えた。

だが。

ルリードは不幸という運命から逃げられない。

老夫婦は会話する。

「最近物騒な事件が起こってるそうじゃの」

「ええ、聞きました。子供を誘拐する事件でしょう。それも幼児ばかりを…」

老夫婦はスヤスヤと籠の中で眠っているルリードを見る。

「ちょうど、あの子くらいの子供を…恐いのう…」

「ほんとにねえ…」

瞬間、窓の扉が勢い良く開け放たれ、生温い風が部屋の中に吹き荒れた。

数人の男達が乱入してきたのだ。

今、まさに会話をしていたことが目の前で起ころうとしている。

「ま…まさか…」

老夫婦は恐怖を感じた。

男達は真っ先にルリードの元へ向かったのだ。

「やっやめて〜ルリード」

「貴様ら！ルリードから離れるんじゃ！」

老夫婦の叫びは虚しく響き、男達の手により簡単に斬殺された。

そんな騒ぎに起きることなくルリードは何も理解できないまま誘拐された。

子供達の誘拐を指示していたのは、バリユアス国王ブロウフィッシュだった。

目的は、隠れた作業。暗黒の所業。それも興味本位での行動だった。

絶望獣と人間を融合させる実験だった。

物心つかない幼児にそれを施すことにより、本人も自覚がなく、従順な獣を作り上げるためだった。

「ぶわっははは〜。そこそこ集ったのう〜。さてさて、それでは、やってみるとするかのおう〜。ぶわっははは〜」

数多く誘拐した幼児の中で、絶望獣との融合に成功したのは…。

ルリード唯一人だった。

あるいは失敗してこの世からいなくなった方がルリードにとって良かったのではないのだろうか。

ルリードはブロウフィッシュの傍から離れることは許されず、城の中へ監禁されることになった。

この中にルリードを愛した老夫婦を殺害した者もいるはずである。皮肉にもこのような形でルリードは仇をとることになっていた。

気が付くとルリードは人の姿に戻っていた。

辺りは血の海で肉片が転がっていた。ルリードの身体も真っ赤に染まっていた。

「ぶわっはは〜。何とも美しいのう〜ルリード。今日からお前がワシの側近だ。ワシの全ての世話をお前がするのだ、いいな。最初の仕事だ。お前がやったその死体を綺麗に片付ける。それが終わったらワシの部屋に來い。いつものように可愛がってやる。ぶわっははは〜」

ブロウフィッシュの笑い声が遠ざかる。

無表情でルリードはその場に立っていた。

後悔も、悲しみも、何も感じない。『氷のルリード』の誕生だった。

つづく

第4部 第6章 ルリードの過去 その2

ルリードの絶望獣化。

この誰にも知られない件によりルリードの位置は不動のものとなった。

周りの目にどう映ろうとも毎日のようにブロウフィッシュ王の側にいるルリードを特別視しない者はいなかった。

身の回りの世話から、食事の世話、夜の慰みまで常に一緒なのだ。実力があるうがなかるうが無視できるはずはない。

日が経つにつれ、ルリード自身の力も確実についてきた。的確な指示と事前の準備、いつの間にかルリードに口を出す者は消えていった。

それでも怪しむ者は出てくる。

なぜルリードが？…と大臣達は当然ながら発言する。訳のわからないところから拾ってきた小娘がなぜ王の側にいるのだ。口々に否定的な批判は当たり前前のように出てくる。実際の真実を知らない者からすれば間違いなく思うであろう。

後日大臣達は忽然とこの世から姿を消す。

前のように地下へ呼び出され、獣となったルリードの圧倒的な力で殺されたのだ。

不満がある人間は王の力で謎の失踪を遂げる。最早完全に誰も言う人間はいなくなつた。

ルリードも何も感じない毎日が続いた。

日々の横暴な王の愚痴を聞き、それに返事をし、相槌を打ち、必要ならば用意する。そこには感情はない。何も考えずにただ遂行するだけでいいのだ。

虚しさも感じない。ルリードは文字通り「氷」となった。

「初めまして！ムトウと言います！」

「アルヴァニーです。よろしくです、さ」

戦士の2人が挨拶にきた。

幼馴染だという2人のムトウとアルヴァニー。

ルリードの部下として最も近い立場になる。この頃の2人は運が良い事に王に対して何の疑惑も湧くことはなかった。

後、その疑惑によって命を落とすことになる者もでるのだが…。

「……」

元気の良い2人を前にしてもルリードは相変わらず静かだった

「あ…あの…ルリードさん？」

「お…おい、怒ってる、さ。お前が変に明るいかからだぞ」

「…ってそんなただの挨拶だぞ」

焦る2人を見てルリードは溜息をついた。

「怒ってはいない。元々こんな性格だ」

ルリードは冷静に言った。

「えっ、あっ、はい、どうも、よよよ、よろしくです」

「すみません、ルリードさん。とにかく頑張ります。よろしくお願

いします、さ」

「……」

ルリードは何も言わずにその場から消えた。

ムトウとアルヴァニーはお互いに顔を見合わせた。

「噂には聞いていたが…。なあ、アルヴァニー」

「ああ。こ…恐いなあ…ルリードさん」

ムトウとアルヴァニーのルリードに対する最初の印象も「氷」だった。

そんなルリードの氷の心を溶かすものは出てくることはないと思
っていた。

しかし。

現れた。

バロゲニア神殿で。

ガルド会議に。

ルリードのために料理を作ってくれた男性。緊張した面持ちで差し出してくれた。

バロゲニア神殿の大神官の息子にして、大神官デスペラド殺害の容疑で追われて現在逃亡中の男。

今日の前で絶望獣と化したルリードに呼びかけている男。
グリークス。

気持ちのこもった料理を食べた彼女には1つの確信があった。

大神官殺しは絶対にグリークスではない。

王には言えない確信。

自分の中だけの確信。

それは揺らぐことのない確信。

国へ帰る途中もふとした時に思い浮かべるのはグリークスであり、
グリークスの料理だった。

心を閉ざしたルリードに差し延べる光の手。希望の手。

グリークスの一言が氷の心を溶かす。

なによりも自分のことを大事に想う叫び。

『俺と一緒に来い！』

ルリードの心の暗闇に響くグリークスの言葉。

込み上げる感情。

喜び、悲しみ、切なさ。

身体が震える。

キシヤアアアア。

咆哮でしか返事が出来ない。

返事は1つ。

…一緒に行きたい。

）
第6章 ルリードの過去
終
）
第7章につづく

第4部 第7章 華麗なる脱出 その1

ボズとステュー、そしてルシアに緊張が走った。

奥の方、グリークスとオークランドが向かった方から聞き覚えのある叫びが聞こえたからだ。

キシヤアアアア。

絶望獣の咆哮。それは、ルリードのものだということは容易に想像できる。

しかしながらルシアの緊張とは別に高まる別の緊張感がボズとステューにはあった。

絶望神の人格がルシアの身体の中に宿っているために、絶望獣事態の影響でその人格が目覚めやしないかと2人は思っていた。現実的にそうだった予兆があったからルシアは離れた場所にいるようになっていたのだ。

「今のは…」

何事もないかのようにルシアは咆哮がした方を向いた。

ボズは恐る恐るルシアの表情を窺いながら喋った。

「う…うん、グリークスさんがいる方だ。しかも、あの声は…」

「絶望獣」

続けてステューが言った。

「大丈夫かなあ…」

ボズが心配気に言う。グリークスやオークランドのこともだが、何より心配なのはアリシエのことだった。

「僕達が今出来ることは、グリークスさん、オークランドさんを信じてることだよ、ボズ」

ルシアがはつきりと言った。絶望獣の影響など全く感じられなかった。

「2人がアリシエを連れてきてすぐに逃げれるように逃走経路を、つまりこの場所を確保することが大事だよ。気持ちはわかるけどね」

ルシアはボズとステューを見た。ボズは頷いた。ステューは何も言わなかったが、ボズと同じ思いだろう。

それにしても、絶望獣に対して何も影響のないルシアがボズには不思議だった。前は気を失うほどに苦しんでいたはずなのに。

そういえばさっきの咆哮は心なしか哀しそうにボズの耳には聞こえた。

ルシア達の目を盗んでその場から抜け出したクラウボは遅れてグリークスが向かった部屋へ走っていた。

なんとしてもアリシエを助ける一心だった。

今回の原因を作った責任を取るつもりだった。

アリシエを誘拐さえしなければ、こんな所に連れてこられて、危険な目にあう必要はなかった。

いや。自分のことではない。自分のやっていたことに憎しみを感じる。2度とこんなことはこれからしないだろう。真つ当に生活をすることをクラウボは心に誓う。

その前に、アリシエだけは必ず助ける。クラウボは決心していた。部屋に目の前まできた時に、グリークスの怒りの声が聞こえた。

「ルリード！こんな変態野郎の所にいつもまでもいることはねえ！戻って来い！俺がなんとかしてやる！俺がお前を助けてやる！」

かつてない程のグリークスの怒りが伝わってくる。

グリークスが絶望獣となったルリードに歩み寄り始めた。

「グリークスさん！」

オークランドが止めに入ったがグリークスには聞こえていない。

「馬鹿が！この親殺しが！ワシのルリードを助けるだとお？！」

ブラウフィッシュユ王が顔を真っ赤にして怒鳴った。

「俺と一緒に来い！ルリード！」

グリークスがルリードに手を差し延べた。

獣に言葉がわかるものか。クラウボは内心思った。

キシヤアアアアアアアアアアアアアアアア!

だがこの絶望獣ルリードの叫びは獣の叫びではない。人として、人間としての、哀しさをのせていた。

クラウボの視野にアリシエの倒れた姿が入った。

アルヴァニーが助けようとしたが、ルリードによって一緒に吹き飛ばされたのだった。多少の傷は負っているようだったが無事に見えた。

助けにいかなければ…瞬時にクラウボの脳裏は切り替わった。

「どうしたのだ？ルリード！早く、早くこいつらを殺さんか！」

ルリードはブロウフィツシュの必死の命令に全く動きを示さなくなった。絶望獣としてブロウフィツシュの命令は絶対である。今まではそんなことなかったのだ。それが初めて機能しなくなっている。ブロウフィツシュに怒りと戸惑いが表情に表れた。

「ルリード！ルリード！」

グリークスは叫ぶ。今の反応を見て悟った。絶望獣の力と争って苦しんでいる。ルリードは勝てる。ルリードの意識が闘っているこの時が絶好の機会なのだ。

「オークランド。なんとかならないか？お前の…その、医療だとか、回復魔法とかで」

「む…無理です、傷や病気の手当てなどは僕の専門ですが、この状況は元の姿に戻すことですから…専門外です」

「くそっ、どうすればいいんだ」

グリークスは悔しそうに唇を噛んだ。

「ひよっとしたら…」

オークランドが閃いた。

「ルキボル国でルシアに絶望神の人格が現れた時、どうしようもなく手が付けられなかったのですが、意識を失うことがあったんです。そうなるに次に目が覚めた時には元のルシアに戻っていました。」

ということば…」

「気を失わせればいいってことか」

グリークスが後に続いた。

「ええ、恐らく。でも…どうやって…?」

オークランドが困ったように言った。ルリードは動きを止めているが、恐ろしい力を持った絶望獣である。簡単な攻撃で気絶させることなど出来るわけがない。

「ま…任せろ」

グリークス達の会話を聞いていたムトウがヨロヨロと立ち上がった。

「ムトウ」

「この渾身の拳を、ルリードさんの鳩尾にでも喰らわせれば、意識くらいはなんとか出来るかもしれない。ただし、1回が限度だがな」
ムトウの提案に賭けるしか術はない。

だがブラウフィッシュが黙って見ているはずはなかった。

つづく

第4部 第7章 華麗なる脱出 その2

ムトウが立ち上がったのを当然の如くブラウフィッシュが見逃すはずはなかった。

「むう！ムトウめ、何をする気だ！何をしようともやらせはせんぞ！」

ブラウフィッシュは睨みながら身構える。何をするのかは想像できる。腕つぶしの強いムトウの拳でルリードを気絶させるつもりなのだ。確かにルリード自身の意識がとべば元の姿に戻るであろう。させてなるものか。ブラウフィッシュはムトウ達の動きを凝視した。フラフラとムトウはルリードを見据えた。その身体をグリークスが支える。とても力を出せるようには見えなかった。

「待っていてください。ルリードさん。必ず…元に戻してみせます」ムトウは呟いた。

「大丈夫かムトウ？」
心配そうにグリークスが尋ねる。

「も…問題ない…早く、ルリードさんの傍に連れてゆけ」
ムトウは厳しそうな表情で答えた。問題があることを物語っている。ムトウの身体がもつのかどうか。

「…ふん、やはりルリードの気絶させるためか」
ブラウフィッシュは笑みを浮かべる。今なら簡単に迎撃できる。まともに動けないムトウはグリークスの支えがないと動けないのだ。そうなる目撃は遅い。ブラウフィッシュの衝撃魔法でも充分当てることができるはず。

ブラウフィッシュの両手が灰色に輝き出した。

「ぶわっははは、死ぬがいい、ムトウ」

ブラウフィッシュは狙いを定めた。

刹那。

1つの影がブラウフィッシュの目に入った。

人だ。ムトウとグリークス以外の誰か。オー克蘭ド？いや違う。グリークスの方からの動きであれば嫌でも早く目に入る。予想外の場所からだ。まさか、奴らの仲間かっ！

「誰だ！？」

ブラウフィツシユは叫んだ。

影の正体は男。それも向かっている方向は、少女アリシエの方。

「クラウドボ！」

グリークスの声。

「ぐっ、仲間か！」

ブラウフィツシユは2つの選択を余儀なくされた。

クラウドボは覚悟を決めて走った。

目指すはアリシエ。必ず助ける。今なら助けることができる。ブラウフィツシユの意識がグリークスへ向いているこの隙が機会だ。

グリークス達の危機を見捨てるわけではないが、何かの犠牲は仕方がない。冷酷なようだが、クラウドボの優先はアリシエの救出だった。

自分の汚点。償い。アリシエを助けることが、生まれ変わる事だと思っていた。

あと少し。あと少しでアリシエに届く。

「クラウドボオオオ！」

グリークスの今まで聞いた中で一番何かを予感させる叫びだった。それも嫌な予感を。

クラウドボは驚愕した。

ブラウフィツシユの手から放たれた衝撃魔法がアリシエに迫っていた。

「！！！」

2つの選択肢からブラウフィツシユはクラウドボ、アリシエを選んだ。ムトウとグリークス達は動きが遅い分いつでも始末できる。動きではクラウドボの方が早い。攻撃をするならクラウドボ達。遅い衝撃

魔法ではクラウボに当てることはできない。狙うなら、アリシエだった。動かないアリシエなら狙いはつけやすい。

「ぶわっははは、死ぬがいい」

醜い笑いが辺りを包む。

クラウボは焦った。このままでは間に合わない。衝撃魔法はアリシエに当たる。守れない。守ることが出来ない。クラウボの脳裏に言葉が蘇る。

何かの犠牲は仕方ない。

「…く…くそお！」

クラウボは力を振り絞ってアリシエに飛びついた。クラウボの決死の覚悟だった。アリシエを助ける。アリシエを守る。

そして、それは最初で最後の覚悟だった。

「ぬあっ?!なにいいいい！」

「クラウボ！」

ブrouフィッシュとグリークスの声が同時に木霊する。

ズドン!

衝撃魔法はクラウボの身体に直撃した。

「ぐぼっ！」

玩具のようにクラウボの身体は弾け飛んだ。

壁に叩きつけられ、頭から地面に落ちる。クラウボは消えかかる意識を必死で堪えた。アリシエの姿を確認する。無事だ。無傷だ。

「へっへへ…」

心の底から喜びの笑いが漏れる。助けることが出来た。守れることが出来た。

クラウボは這いずりながらアリシエに近づいていった。まだ終わっていない。ここから逃げ出さないといけないのだ。

「うっうっ…に…逃げる…逃げるんだ…」

クラウボは座り込んでいるアリシエの手を握った。

「こんな所に送り込んで…わ…悪かったな…アリシエ…。でも安心

しろよ…必ず俺が…お前を逃がして…」

クラウボはもう2度と動くことはなかった。だがそれは気持ちのいい程の安らかな顔だった。

無意識にアリシエはクラウボの手を握り返していた。

「ぶ…ぶわ…ぶわっはは…焦らせおって！」

ブロウフィツシュは安心したように言った。

「さあて、ゆっくりと料理してやるか」

ブロウフィツシュは再度衝撃魔法の準備をした。

瞬間、ブロウフィツシュに電撃が走る。

おかしい。おかしくないか？

グリークス、ムトウ、アリシエ、奴らの仲間、絶望獣ルリード、

ブロウフィツシュ本人。

この場に足りない人物がいることに今気づいた。

ルキボル国王オークランド。

さっきまでいたはずのオークランドが見えない。

いや。よく見るといえる。グリークス達の影に隠れて。何をしている。

隠れる理由はなんだ？気付かれたくない理由はなんだ。

「ぬあっ！しまったああ！」

理由がわかった瞬間、ブロウフィツシュは口に出していた。

オークランドは医療大国ルキボル。王家の人間だけが出来る回復魔法がある。その回復魔法の準備を悟られないためにオークランドは隠れていたのだ。

「癒しの精霊、慈悲の精霊、我の声に応えよ生命の精霊、右手に宿りし希望の光よ、太陽神の名のもとに、今こそ、その力を大地に捧げよ…。回復魔法『サイツ』！」

オークランドは素早くムトウに回復魔法をかけた。

完全回復には時間がかかるが、一瞬でも魔法を受けるとある程度の回復は見込める。

グリークスは力尽きたクラウボを見る。結果的にクラウボがブロウフィッシュの気を引いてくれたおかげでオークランドの魔法詠唱時間が稼げた。

「…ありがとう、クラウボ」

グリークスはそっと呟いた。

つづく

第4部 第7章 華麗なる脱出 その3

「そっそうはいくかあ！」

ブラウフィツシユは重い身体を揺すりながら絶望獣ルリードの方へ走り出した。

オークランドの回復魔法でムトウ渾身の拳が炸裂すればさすがのルリードも倒れるだろう。しかもなぜかルリードは動くことすらしてないのだ。

クラウボを葬るために衝撃魔法を発動させたばかりのブラウフィツシユは続けて同じ魔法を発動させる力はなかった。

「ルリードはワシの物じゃあ！貴様らなんぞに…っ」

「遅かったようですね」

ルキボル国の王と呼ぶにはまだ幼さが見え隠れするオークランドの笑顔がブラウフィツシユの目に入る。

「ぬあっ…」

「回復は完了です。なにも全快させる必要はないのです、ブラウフィツシユ王。彼が一撃でも出す力さえ戻れば…ね」

オークランドの傍で溢れんばかりの力強い肉体を露わにした戦士が蘇える。

「うおおおっ！ふっかあ〜っ！」

戦士ムトウが立ち上がった。

「時間がねえ！ムトウ！速攻でケリつける！」

グリークスが叫ぶ。ルリードは今、絶望獣という狂気と、本来の人間として、女としての理性とが戦っているために、動きが止まっている。ルリードも頑張っている。今この時が勝機なのだ。

「任せとけ！ルリードさん、お許しを」

ムトウは構える。

「ぐおお！させるものか！」

ブラウフィツシユの横を素早くオークランドが駆け抜ける。魔法

発動のせいも少し疲労を感じさせた。

「なにいいい！」

オー克蘭ドの行く先はクラウボが自分の命を賭けてまで守りきった少女、アリシエ。

ブロウフィツシユはダラダラと脂汗をかきながら、ムトウとオー克蘭ドを交互に見た。どちらを優先していいのか、瞬時の判断が出来ない。正確な判断など元々出来るような人間ではなかった。

「きつ責様らああああああ！」

ブロウフィツシユは絶望獣の咆哮に負けず劣らず大声で奇声を発した。

ムトウの精神統一が終わった。

「おおおおおおお！」

ムトウの周りの空気がほんのわずか歪んだ。全てを託したムトウの拳は見事にルリードの腹部に炸裂した。

「キ……」

絶望獣ルリードの姿が人間の姿へと戻っていく。ルリードの意識が失われたからだ。

「やった…ルリード良く頑張った」

「へへっ、どんなもんだ…あっ」

ムトウは目のやり場に困った。絶望獣となったルリードの衣服は破れていたのでルリードは裸だった。

「…って、いや、てゆーか、そんなつもりじゃあなくて、ルリードさん、ごめんなさい」

慌てるムトウと横目に、グリークスは崩れ落ちるルリードを支え、自分の羽織っていた上着をルリードの白く美しい身体に被せた。

グリークスは気を失ったルリードを抱きかかえた。

「脱出するぞ！」

そう言つとグリークスは走り出した。

「あっ、ちょっと、待て！」

ムトウも後に続く。

その場に残されたブラウフィッシュは呆気に取られていたが、すぐにアリシエのことを思い出してアリシエを探した。…だが、アリシエはいない。グリークスが走り出すよりも早くオークランドはアリシエと一緒に逃げ出していたのだ。

「ぬっつっつっつっ！あやつら！生かしては返さんぞおおお！」

ようやく我に返ったブラウフィッシュの悔しそうな声が響いた。クラウボの亡骸の傍に温かいぬくもりが残っていた。アリシエの言葉に出来ない小さな想いがしつかりとクラウボの手に宿っていた。

「オークランドも薄情だよな、俺達を見捨てて先に逃げてるなんてよ。お前ルキボル国の王様だろ？どうなんだよ、そこんどこ」

ルリードを抱きかかえながら猛烈な速さ走ってるグリークスは嫌味を言う。

「僕は元々体力ないんですから、先に逃げて当たり前でしょう？現にこうやって簡単に追いつかれていますし。というか、僕の身分は関係ないでしょ。とにかく話しかけないでください。結構：疲れるんですから」

同じようにアリシエを抱きかかえているオークランドは苦しそうに言った。

「えっ？王様？ルキボル国の？え？え？ええ！？」

何も聞かされていなかったムトウは驚きの顔をする。確かに身分は言っていない。名乗っただけである。

「あゝ、もう！その話は後にしましょうよ！」

面倒臭そうにオークランドは言った。

「来たあゝ！！！！」

遠くからグリークス達が向かってきているのをボズは確認した。

「来たよ！ルシアさん！アリシエが見える！やったあ！」

アリシエのことしか考えていないからなのか、驚異的な視力でアリシエの姿だけはいとも簡単に確認できた。

「ボス、ステュー、僕達も逃げましょう」

ルシアは言った。

「ルシア、ボズ、ステュー！逃げるぞ！駆け抜ける！」

グリークスが叫んだ。

「了解！」

ボズが答える。

全員が合流した。後は無事にバリユアス国から脱出するだけとなった。

「逃げるアテはあるのか！」

ムトウの質問に自信たっぷりの顔でグリークスは言った。

「ある。アリシエが乗せられていた赤馬車だ」

「なるほど！それならこつちだ、ついてこい！」

ムトウが先頭に立つ。

「…ところで、オークランド、クラウボ…さんは？」

ルシアが聞いた。

「…残念ながら…アリシエを助けるために…」

言いにくそうにオークランドは答えた。

「そうですか…」

「彼のためにも、必ず全員生きて脱出しなければ」

オークランドは決意した。

「…そうですね」

ルシアも笑顔で返した。

「あつ、あれだ！あの赤いのだ！」

ボズが赤馬車を見つけた。幸い馬も元気そうだ。

「これは好都合だ。すぐにも出発できるぞ」

「グリークス達は飛び込むように乗り込んだ。」

「おい、聞こえるか？」

「ムトウの投げかけに耳を澄ます全員。」

「トトトト……。」

まるで地響きのようなこの音は逃げてきた方向から追うように聞こえてきた。

「追手の兵士だな。恐らくブロウフィッシュのやっていたことなど知らない、単に反逆者が逃げたという情報だけで動いている兵士だろう。」

「そんな解説はいいから、早く出発しようよ！」

ボズが突っ込みを入れる。

一瞬しんつと静まる。

「誰が手綱をつかむんだ」

ステューが呟いた。

今まではクラウボの役だった。皆が顔を見合わせる。

「僕は追手をこの弓矢で撃退しないといけないから無理だよ」

ボズが口火を切った。

「俺もだ……それと……アリシエの様子を見ないといけない……」

「はあ？ステュー、お前何言いやがるんだ！」

ボズがステューに詰め寄る横でグリークスが言った。

「俺はルリードの看病があるから、無理だ」

「……そ、そうですか」

オークランドはここまでではつきり自信持って言われると何も言えなくなった。

「じゃあ、僕がやりましょう」

ルシアが名乗りを上げた。

「大丈夫か、ルシア？」

「何とかやってみます。オークランドは何かあった時に手当てをして貰わないといけませんから、手が空いてないといけません……
となると僕しかいません」

「おしつ、話は付いたみたいだな」

ムトウが元気良く言った。

「じゃあ、達者でな、頑張つて逃げ切れよ。…それと、ギリクス、ルリードさんをよろしく頼むぞ」

「えっ？貴方は…？」

「オークランド」

聞くオークランドを頭を振ってギリクスが制した。

「ああ、任せろ」

ギリクスにはわかっていた。ムトウと一緒に馬車に乗ることはない。ムトウの覚悟は既にブラウフィッシュと対峙した時点決まっていたのだった。

「…ムトウさん！どこ行くんだよ！」

ボズが心配そうに言った。

振り返り、ムトウは笑顔を見せた。

「最後の、大仕事さ」

そう言うとムトウは追手の方へ向かって走り出した。ムトウは我が身を犠牲に時間を稼ぐつもりなのだ。赤馬車が逃げ切れるようにたった1人で。それはムトウの死を皆の脳裏に連想させるには十分な行為だった。

「そんな！死んじゃうよ！ムトウさん！」

ムトウの姿が小さくなり見えなくなった。

「ルシア！出発だ！」

ボズの声が消すほどの大声でギリクスが号令を出した。

つづく

第4部 第7章 華麗なる脱出 その4

自らの命を捨てて突っ込んでいったムトウの姿を確認する暇もなく、ルシアが操る赤馬車は颯爽と城から飛び出た。

目指すは港だ。船に乗り込んで忌まわしきこの国から脱出する。それには追っ手を振りきるしかない。

別の道筋から別の追っ手が現れた。

「ちっ…しっっこいぜ」

グリークスが吐き捨てる。

城の門でブラウフィッシュが何やら叫んでいるのが見えた。

「奴らを捕まえる！ルリードを取り返せ！早く！早く行くのだ！」
醜い巨体を揺らしながら叫び喚いている。

グリークスはブラウフィッシュを睨む。

「そういえば、ルリードはワシの物だとか言ってたが…。残念だな、ブラウフィッシュ王。ルリードは……」

ブラウフィッシュの耳には届くはずないが、グリークスはブラウフィッシュへ訴えかけるように言った。

「俺の物だ」

オークランドが照れ笑いをする。ここまではっきりと気持ちを出すグリークスが羨ましいとさえ思った。

「追っ手がきたぞ」

外を見ていたステューが言った。すぐにボズへ向き直る。

「この状況だと飛び道具しかない。全てはお前の腕にかかっているぞ。大丈夫か？ボズ」

「任せとけて！」

ボズはステューの不安な言葉に、自信を持って答えた。

「限りなく…不本意だが…」

「だから、お前はいつも一言多いんだよっ！」

ボズは弓を構えた。これまでの戦い、冒険で、弓に関してボズは

自信をつけ始めている。大事な人を守ることが出来始めている。今もそうだ。ボズの手にはここからの脱出がかかっている。ステューの言葉には嘘はない。ボズの魂は燃え始める。

「ボズ、頼むぞ！」

オークランドが言った。

「任せますよ、ボズ」

遠くからルシアの声も聞こえる。

グリークスはルリードに気をとられすぎである。

「アリシエは俺が見ている」

ステューの一言にまたしても怒りを覚えつつ、ボズの身体はすうと静かに冷え込んでいくのを感じた。

馬に乗った追っ手がくる。対してボズの矢の数は僅か8本。とてもじゃないが足りない。ボズもそれはわかつている。

けれどボズには確信があった。勝利への確信。何も1本1本矢を当てて倒すことはない。

「いっくぞ〜！」

ボズはいきなり馬の足目掛けて矢を放った。

矢は見事に馬に命中。体勢を崩した馬は倒れこむ。その後ろを走っていた馬が倒れこんだ馬に引っかけり同様に倒れる。更に後ろの馬が、その更に後ろの馬が、玉突きのように転がっていった。

「すごいぞ、ボズ！やるじゃないか！」

オークランドが感嘆の声を上げる。

「へへっ」

ボズは完全に狙っていたことだった。常に色々な状況を想像し、どうするべきかを考えていた。取り柄は弓しかない。ボズはそのことを子供ながらに理解していた。

「いくぞ！連続攻撃だ！」

正確に馬の足を捉えて次々に倒し転がしていくボズの腕前に、追っ手の兵士は成す術もなかった。

気が付けば、残り2本を残して、追っ手は全て消えていた。

「おっしゃあ！」

高らかにボズは叫んだ。

「なんだとお！」

ブロウフィツシユは追っ手が全員捲かれたという報告を聞いて怒鳴った。

「じゃあ、ルリードは？ルリードはどうなった？」

兵士は何も答えることができない。

行き先を見たものは誰もいないからだ。ルリードと一緒に逃げたのか、それとも途中で別れたのか、全員が追いつけることができなかったために、その後の状況などわかるはずがない。

「ぐっ、ぐぬぬぬう…おのれ、親殺しのグリークスめえ…。奴ら、許さんぞ、許さん！」

ブロウフィツシユは拳で力いっぱい壁を叩いた。あまりの強さに壁にヒビが入ると同時にブロウフィツシユの拳の骨にもヒビが入った。

「港だ！着いたよ！」

ボズが嬉しそうに言った。

無事に港に辿り着くことができた。

「見事な扱いですよ、ルシア」

ソツなくこなすルシアの手綱つぷりにオークランドは感心した。

「ありがとう、オークランド」

ほっとした表情でルシアも答える。

「よしっ、さっさとここからオサラバするぞ」

グリークスは再びルリードを抱きかかえようとした。

「いい…一人で立てる」

ルリードの目が覚めていた。

「ところで…」

ルリードはグリークスに話しかけた。

「なんだ？」

「…私は物じゃない」

〈 第7章 華麗なる脱出 〉 終

第4部 想いは必ずその心に エピローグ アーガス国へ辿り着いた者達

「ようやく着きましたね」

疲れきったオキュラスが目を輝かせて言った。

ルシア達がバリユアス国で大立ち回りをしていた頃、ハツシュ、ファミリストン、オキュラス一行は長い旅路を経てハツシュの故郷アーガス国へ辿り着いた。

目的地はハツシュの師匠であるクラシエイカ。現状報告とこれからの動きの指示を貰うために戻ってきたのだ。

「ここが剣の国アーガス…さすが最古の国のだけあるな。立派な町だ」

ファミリストンが感心する。彼の国は遙か北の孤島ゲルニア国。国同士の格は天と地ほどの差がある。

「…そうか？うるさいだけの町だ」
嫌な思い出でもあるのだろうか、ハツシュは淡々と答えた。

入り乱れた町の中を、込み合う人々を避けるようにハツシュ達は進む。

「ここだ」

ハツシュはある家を指差した。

「ここに師匠クラシエイカがいる」

ハツシュは家へ向かい扉を叩いた。

「師匠。ハツシュです。ただいま戻りました」

遠くから返事が聞こえる。

「おお、ハツシュがよく戻ったのう。まあ、入れ」

3人は家の中に入った。

「すまんの、腰が痛くて思うように歩けないんじゃ」

クラシエイカは腰をさすりながら、オキュラスとファミリストンを見た。

「ほう…彼らが、ゲルニア国の…」

「はい、その後バロゲニア神殿に行ったのですが、目的の人とは出会えませんでした」

「そうか、ご苦労だったな、だがゲルニア国でも見つけることができなかつたようだな、ハツシュよ」

「えっ？」

クラシェイカの言葉にハツシュは動揺した。クラシェイカの指示は英雄を見つけてくること。1つ目の指示はゲルニア国。2つ目はバロゲニア神殿。

2つ目のバロゲニア神殿では見つけることができなかつた。だが1つ目のゲルニア国は違う。ハツシュはファミリストーンという男を見つけてきたのだ。

ハツシュは思わずファミリストンの顔を見た。

ファミリストーンも不安な表情で返した。

オキュラスだけが、伝説の剣士に会えたという喜びの笑みを浮かべていた。

〈 第4部 想いは必ずその心に 完 〉 第5部につづく 〉

第11回こぼれ話

皆さんいつもありがとうございます。
読んでなくてもありがとうございます。

さて…第4部終了です。…個人的な感想を言わせて貰えれば…。
長かった…。
とにかく長かった…。

しかも「第4部第2章を終えて」去年の10月20日くらいなので
すが、年内に第4部を終了させると書いています。

実際は…？

おいおい4月直前だぞ？

文章力の成長すらみられないのですが、なにより忙しくて、書く時
間が時間がなかつたんです。

この頃ちようど転職して、その辺が理由なんです、僕自身もスト
レスが溜まっていた時期でした。

楽しみに？待っててくれていた人には申し訳ありません。

恐らく今後もこのような感じになるかと思しますので、なるべく1
回の文章を長くするように努力します。

本編の話ですが、ルリードの正体。そして気になるグリークスの恋
心。

寄り道をしましたが、やっとアーガス国へ戻ることになります。
ハッシュ達は一足先にアーガス国へ到着しました。

いよいよ第5部はハツシユ達とルシア達が集合します。

ですがただ集るだけではありません。

事件があります。加速度的にハツシユ達とは別に争いも始まります。バリュアス国ブロウフィツシユ王の動向も気になります。

どう絡んでいくのかはお楽しみください。

第5部開始は4月になるかと思えます。

4月と言えば、この小説を書き始めて2年になります。

我ながら趣味で書いてるわりにはよく続いている方だと思えます。

第5部のタイトルは決まっています。

「託される意志」

だいたい想像も付くかと思えますけど、なるべく更新早くできるように頑張ります。

皆さんよろしくお願いします。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5216c/>

七英雄物語 4

2009年3月24日10時37分発行